**№28　テーマ『良い人間関係をつくる実力』**

**講話日2005年5月16日**

**芳村：皆さん、こんにちは。**

**一同：こんにちは。**

**芳村：今回は前回とだいぶ間が開いてしまって、前回、１月にですね、お話をした話の続きになるわけなんですけども、だいぶ間が開いてしまったので、少し復習をしながらお話を始めていきたいと思います。今年度は、この愛の問題について、体系的にいろいろな角度からお話をしていくという計画ですけども、前回は愛の本質とはなんなのかという、そういうこの角度から愛の問題を取り上げました。とにかく今、全人類的、全世界的にですね、この人間関係が崩壊していくというふうな、そういう現象が非常に急速な勢いで進んでおります。ご承知のように、離婚の激増とかですね、幼児の虐待とか、それから高齢者の虐待であるとか、あるいは個性の時代になっておるのに、その違いというものが許せなくって、違いを理由に戦争をして殺し合うというふうな、そういう状況が全世界的に広がってきておると。ただ宗教戦争だけではなくって、民族の違いとか、ちょっとした利害、損得の違い、いろんな違いを理由にですね、人間同士が対立をするという状況が非常に色濃く進んできておるわけであります。**

**そういうふうなことを考えるとですね、今こそわれわれは、この人間と人間を結び付ける力である愛の力を成長させていかなければですね、これからの人類の未来というものをよりよい方向性に持っていってですね、そして、われわれ自身がより幸せな人生を生きていくというふうな、そういうこの力をつくっていくことができない。今、初めて人類は、愛の実力を成長させる、愛の力を成長させることによって、この人類として成長し、進化していくというふうな、そういう時を迎えておるんだという、そういう認識を持たなければならないわけですよね。だけども、今のわれわれの愛というのは、残念ながら、自分と同じ考えの人しか愛せない。相手が自分と同じように考えてくれないと、その人が好きになれない。考え方が違ったら、敵対心を持ち、対立をし、反感を持ってですね、そして共にはやっていけないというふうな、そういうこの状態の愛が今の人類の愛であります。**

**だけども、自分と同じ考え方の人しか愛せない。また相手が自分と同じような考えになってくれないと、その人が好きになれない。そういうことはいったいどういうことなのかといったら、それは自分しか愛せない人間だ。自分と同じ考え方の人しか愛せないということは、自分しか愛せない人間だ。自分しか愛せないような愛は偽物の愛だ。自分しか愛せないような愛では、とても子孫を残すようなことはできるはずがないと。愛というものの根底には、種族保存の欲求というですね、そういう生物学的な根底があって、いわゆる男が女を愛するというですね、他者を愛するというふうな、そういうこのことによって、いろいろ人間と人間との間のですね、関係を結ぶ。そういうこの愛の力というのは芽生えてくるわけですんで、男が女を愛し、女が男を愛する。そういうこの人間と人間を結び付ける力が愛である。で、人間というのはみんないろいろな考え方があるし、いろんな性格があるからですね、だから、自分しか愛せないような愛というのは、それは偽物の愛である。そういうことをですね、まず基本的にわかっていなければならない。多分、ご自身のことを考えられるならばですね、自分もやっぱり、そういうこの偽物の愛しか持っていないなということがはっきりわかってくるはずであります。**

**だけど、この自分と同じ考え方の人しか愛せない。自分と同じ宗教の人しか愛せない。自分と気の合う仲間としか一緒にやっていけないというですね、そういうこの愛の段階では、とてもこれからの個性の時代というものを生きていくことはできません。個性の時代というのは、お互いに違いを認め合って、お互いに違いを許し合って、そして考え方の違う人と、性格の違う人と、職業の違う人と、立場の違う人と、どう仲よく生きていくかというのが、個性の時代というものを生きるための前提条件ですからね。だから、自分と違う考え方の人とは仲よくやっていけないということは、その人はこれからの個性の時代には適応できない。個性の時代においては、そういう人は確実に不幸になってしまう。個性の時代をたくましく生きてですね、その中で幸せと成功を勝ち取ることができる。そういう人にはなれない。そのことを意味してるわけですね。**

**個性の時代というのは、先ほど申し上げたように、お互いに違いを認め合い、許し合いながら生きていく。違うということを嫌だなと思うんじゃなくって、個性の時代というのは、違うんだから、教え合えるじゃないか。違うんだから、学び合えるじゃないか。違うんだから、助け合えるじゃないか。違うんだから、協力できるというですね、そういうこの意識をつくっていかないと、個性というものを認め合いながら、仲よく生きていくという、そういうこの愛の力はつくり出すことができません。**

**とにかく今、なぜですね、われわれは、この愛の力というものを成長させていくという努力をする必要があるのかという、そういうこの理由をですね、ちゃんと押さえておいてもらって、そして、この男女の愛だけではなくって、親子の愛も、また夫婦の愛も、師弟の愛も、また一緒に仕事をしていく仲間同士の人間関係としての愛もですね、そういうこの人間と人間を結び付ける力というものをもっともっと成長させていって、職場においても、対お客さんとの関係においてもですね、本当に気に入ってもらえる、そういう本当に仲よく、お互いに認め合いながらですね、この生きていくことができる。そういうこの力をつくっていく。これはもう仕事の上においてもですね、自分の人生を考えるうえにおいても、根本的に大事な課題であります。それに真剣に取り組まなければ、必ずその人は、人生において不幸を自ら呼び寄せることになってしまう。せっかく好きで結婚してもですね、長く一緒におれば必ず違いが目立ってきますから、常に離婚の危機に直面してしまうと。そういう不幸な人生にならないためにはですね、本当に人を愛するとはどういうことなのかという、そういうこの愛の力を成長させていかなければなりません。**

**残念ながら、今日の社会においては、誰一人、幸せな結婚をしておる人はいません。離婚してない人でも不幸です、みんな。表面的には仲よくやっておる。あるいは、今まで一回も夫婦げんかはしたことがないというようなですね、そういう人もいらっしゃるかもしれませんけども、だけども、そういう人でも、それはなんでそうなのかといったら、我慢してるからですね。お互いにみんな我慢して、耐えて、そして悩んで、それを表に出さないで、なんとなく仲よくやってるように見えるだけであってですね、その本心をさらけ出せば、そこには苦しさとつらさが存在するという、そういうのがですね、残念ながら現実の夫婦の関係性の実態であります。だけど、これは夫婦だけじゃない。いろんなこの人間関係、すべての中にですね、そういうこの本当に人を愛せないというですね、そういうふうなこの実態が多々ある。ただ表面的に仲よくしてるだけであって、本当は一緒にいたくないとかですね、そういうふうなことが、非常に現実的には人間関係として多いです。その意味においても、とにかくは、どういうふうに人を愛する力、人間が好きだというね、そういうこの思いを自分の中につくっていかないと、どんな性格の人でも、どんな考え方の人とでも、一緒に仲よくやっていけるというふうな、そういう人間性、これからの時代、平和を要求する時代にですね、求められる人間性というものを自分のものにすることはできません。**

**どんなに頭がよくっても、愛がなければ不幸になります。現実的にどんなに頭がよくってもですね、不幸な人はいっぱいおります。とにかく今ほどこの愛の力の成長が、個人のレベルにおいても、社会のレベルにおいても、また国際社会においてもですね、愛の力の成長が望まれてる時代は、今日のようなですね、こういうこの愛の力が望まれておる時代というのはかつてありませんでした。実際問題、戦争といわれるものもですね、20世紀の中頃までは、戦争は悪ではなかった。戦争こそまさに国家を発展させるための重要な政策であってですね、戦争をして新しい領土を獲得することは国家の発展であると同時に、国民を富ませ、国民に幸せを与えるための重要な政治的課題でした。だけども、20世紀の中頃から以降ですね、そういうこの人間同士が殺し合うという、そういうことに対する反省が生じてきてですね、そして、その戦争は悪だという、そういう思いが、今の人々にとってはですね、常識的なことになってるかもしれませんけども、だけども、今でもまだ戦争をして勝つことに最高の喜びを見いだしてる民族や国家はたくさんあります。まだまだ本当の意味で、戦争は悪だという、そういうこの意識がですね、全人類共通のものになったとはまだ言えません。**

**だけども、いつまでもですね、そういうこの人間同士が殺し合うというふうな、野蛮な行為は、これは続けておるわけにはいかない。その意味で、この戦争という観点からもですね、平和をこれから求めて、平和な社会、平和な家庭、平和な世界というものをつくっていこうと思ったら、やっぱりそこに要求されるものは、基本的には愛です。とにかく愛というものは、人間と人間を結び付ける力である。人間関係から生じてくるすべての問題は、詮ずるところ、愛の力が優れておるか、劣っておるかによってですね、この人間関係から生じてくる問題にどの程度対応できるかが決まるのである。人間関係から生じてくる問題は、結局、愛の問題だ。そのことをですね、基本的にわれわれは考えてみなければならないと。人間関係から生じてくる問題の基本的な原因は３つあってですね、それは愛の能力の欠如であるか、愛の能力の未熟さであるか。あるいは、愛の表現方法の間違い。この３つのいずれかによってですね、人間関係の問題は生じてきます。人間関係の問題が生じる基本的な理由、原因は、愛の能力の欠如、あるいは、愛の能力の未熟さ、そして、愛の表現方法の間違い。この３つがですね、人間関係から問題が生じてくる基本的な理由である。**

**愛の能力の欠如というのはどういうことなのかといったらですね、理性的なこの規則に縛られてですね、相手の心というものを思いやることなく、規則どおりにというかですね、相手のことを配慮することなく、いろいろとものを言ったり、命令したりする。これは、事務的で義務的な対応の仕方ですね。事務的で義務的というこの機械的な対応の仕方というのが、愛の欠如ということですけども、そういうこの相手の心や、相手の事情を思いやることなく、義務的で事務的なそういうこの機械的な対応をする。個性を無視してですね、一律にこの杓子定規な対応をする。そういうところから、人間関係の破綻が生まれてくる。全然、自分のことなんかわかってくれてない。全然、自分のことに配慮してくれてない。そういうこのところからですね、人間関係は壊れていくということがよくあります。それから、この愛の能力の未熟さというのはどういうことなのかというと、愛というのは、求める愛から、与える愛へと成長していく。求める愛が多ければ多いほど、その愛は不幸を招く。お互いに求める愛を持っておれば、これは奪い合うことになってしまいますのでね、愛を奪い合うことになってしまいますので、求める愛というのは、どんだけ相手から愛されてもですね、そこには満足感がない。そういうこの状況になってくる。**

**愛というのは、求める愛から与える愛へと成長していく。子どもは、愛されたいという、そういう気持ちのほうが強くって、求める愛なんですけども、大人になっていけばですね、求める、愛されたいというよりも、愛するという、相手を愛するという、そういうことのほうにですね、愛の行動の重点が移っていって、愛する愛が成長してくることによって、愛によって満たされないということよりもですね、この相手を愛することに力が、重点が移っていくことによって、この愛する喜びというね、そういうふうなところから愛の満足感が生まれてくる。愛すれば愛されるという、そういう構造ができるわけですけど、愛されたいという、そういうこの気持ちが多いとですね、なかなか心は満たされませんし、相手の気持ちをも満たすことはできません。だけど、求める愛から与える愛へと成長していくことによって、自分も満たされ、相手も満たされるという、そういう仕方で人間関係は素晴らしくなっていって、そして、愛は成長していくわけですね。とにかく、この愛の能力の未熟さというのは、求める愛と与える愛、どちらのほうの愛にですね、その愛の重点が置かれておるか。そのことによって、人間関係は大きく違ってきます。**

**愛の表現方法の間違いというのはどういうことなのかというと、この愛というのは、他者中心的な心の働きというのが愛の基本的な構造であります。まあ、感性論哲学では、人生は意志と愛のドラマであるということをお話ししてますけども、意志というのは、これは自己中心的な心の働きであって、愛は他者中心的な心の働きである。われわれが社会を生きていくためには、この自己中心的な心の働きと、他者中心的な心の働きとのバランスがですね、非常に大事である。自己中心的になれば悪人だ。他者中心的になり過ぎれば、単なるお人よしである。この自己中心性と他者中心性のバランスが社会を生きる力である。そういうふうにですね、この考えなければならない。だけども、この意志と愛というものを別々に考えるならば、愛というのは他者中心的な心の働きであるので、この愛というものは他者中心的な心の働きで表現しなければならない。ということは、この自分が相手のことを考えて、こうしたら相手が喜んでくれるだろうと思ってですね、その相手に愛を注いでもですね、相手が愛されてるということを実感してくれなければ、それは愛ではないんですよね。愛は相手によって感じられなければ愛ではない。どんだけ自分が愛しとると言ってもですね、相手がその愛を感じてくれなかったら、愛ではない。**

**お父さん、お母さんは、自分の子どものことをみんな愛してると思うんですけども、子どものほうから言ったら、お父さん、お母さんなんて、全然、俺のことなんかわかってないやないか。全然、子どもに愛が通じてないというね、そういう場合も多々あります。これは男女の関係においてもそうです。男の側が勝手に自分の愛を女に押し付けてもですね、その愛を女が喜んでくれなければ、愛は存在しません。また女のほうが、男性の性を知らないで、自分の女としての立場からのみ、愛を男に示してもですね、その愛が男のほうにとって喜びにならなければ、それは愛ではない。愛は他者中心的な心の働き、相手への思いやり、相手の心を思う、相手の立場を思う、思いやりの精神があってですね、初めて愛は相手に通じるのであって、愛の押し付けはかえって嫌われてしまう。恋愛なんかでも、恋愛が壊れるのはすべて愛の押し付けであります。こんなに私が愛しておるのに、何よ、あんたはと言ってですね、相手を責めるという、これが自己中心的な愛の表現なんです。そこから愛は壊れていってしまう。**

**本当に相手が喜んでくれるというですね、そのことをどういうふうに自分がするかですね、これは対お客さんとの関係においてもそうです。自分が努力してやったことをお客さんが喜んでくれないとですね、あの客はいかんといって、客を責める。これはとんでもない思い違いだと。いいことをしようと思ったら、相手が喜んでくれるまで、どうしたら相手が喜んでくれるだろうということを追求していって、結果を出さなければ、それは価値がない。自己中心的な思いでですね、その他人に対しても、それはこちら側の愛の押し付けであって、こちらの思いの押し付けであって、決して相手の立場を考え、相手のことを考えてやってるとは言えない。自分は相手のことを考えてやってるんですけども、相手にとってはそんなありがた迷惑やと。そんなことをしてくれても、うれしくはない。これでは相手のことを考えてることになりません。自分勝手な思い込みでやってることであって、本当に他者中心的なこの働きで、本当に相手が喜んでくれたという結果を出さなければ、それは愛ではないし、また相手のことを思いやって何かしてるということにはならない。**

**だけど、ほとんどのこの人間関係における愛というのはですね、その愛の押し付け。自分が愛してると思って、自分が愛してるという気持ちでやってるだけで終わってしまって、本当に相手に愛を感じさせてるのかというとですね、そういうことの結果になってないという場合が非常に多いことがある。まあ、これはやっぱり、この友人関係でもですね、この対お客さんとの関係でも、いろんな人間同士の付き合いの中で常に心していなければですね、自分は愛しとるつもりでも、それによって嫌われてしまうということになってしまう。そういう場合が多々あるわけですよ。これは愛の表現方法の間違いによって、本当に愛してるんだけど、関係が駄目になってしまうんですね。それは自己中心的な愛であるからです。愛の本質は他者中心性にある。思いやりだ。相手の気持ちを本当にわかって、そして、その気持ちに応えていくというふうなですね、そういう努力をしないと、そういう愛の表現方法の間違いから生じる問題を乗り越える力をつくっていくことはできません。とにかく愛というのは、人間と人間を結び付ける力でありますから、人間関係から生じる問題はすべて愛の問題ですので、人間関係から生じる問題を乗り越えていこうと思ったならば、われわれは愛の能力を成長させる以外にない。そのことをですね、よくわかっておいてもらいたい。**

**この人間関係の問題というのは、対お客さんとの問題、対上司との問題、対部下との問題、対同僚との問題、あるいは、家族との問題。すべて人間関係の問題ですからね。そういう力を成長させていかないと、自分が幸せになれません。そういう力を成長させないと、自分が不幸になります。そして、だんだん、だんだん、仕事の成績も落っこってきます。何をやってもうまくいかないんですよ、愛がないと。相手に嫌われてしまったり、せっかく心遣いをしても、その心遣いが相手に拒否されてしまう。それでは全然、仕事はできません。結局、仕事ができないという人は、能力に問題があるというよりは、むしろ愛のこの力に問題がある場合が非常に多いです。人間関係がうまくいかなくってですね、仕事の成績が上がらないということのほうが多いです。まあ、そういう意味においてもですね、この愛の力を成長させていくっちゅうことは、非常に大事な現実的な課題です。自分が幸せになるためにも、自分がいい仕事をするためにも、自分が成功するためにも、とにかく愛の力を成長させるということは、今の時代において欠くことのできない重要な課題である。恋愛において成功するためにも、愛の力を成長させなかったら、恋愛も長続きしません。愛しておっても、相手から嫌われます。**

**そういうことを考えればですね、まずとにかく愛の力を成長させていこうと思ったら、われわれは愛の本質を見極めなければならないと。愛とはなんなのかということをちゃんと知らないと、愛の力を成長させることはできません。これは、まあ、前回、話したことなんですけども、これは愛のことを考える場合には、常に頭に置いておかなければならない基本原理なので、復習の意味でまたお話をしますけど、愛の本質とはなんなのか。学問的にですね、問題を考えていく場合には、常にこの時間、空間というこの枠組みを使って考えていかないと、学問的な議論にはなりませんので、愛の問題を考える場合でもですね、この愛における時間論的な本質とはなんなのか。愛における空間論的な本質とはなんなのか。それを総合して愛の本質はこうだと言えるという、これが学問なんですね。この愛における空間論的本質とはなんなのか。それを考えるためにはですね、まず愛というのは人間関係の力である。人間関係とは社会である。だから、社会とはなんなのかということを考えていくことを通して、愛における空間論的な本質が見えてくるというふうに考えなければならない。**

**これは前回の復習ですので、前のことを思い出しながら聞いてもらいたいんですけども、社会とはなんなのか。社会には自分とは違う性格の人がいる。これはおらんとは言えませんからね。おるんですからね。いろんな性格の人がおるのが社会だ。で、学問というのは、誰も絶対に反対できないというものを積み重ねていかないと、学問にならない。ちょっとでも異論を差し挟む余地があれば、それだけ議論には学問性が薄いということになってくるわけですね。最後まで誰も反対できない。誰も異論を差し挟む余地がないというものを積み重ねていくことが、学問というものの価値でありですね、また学問のつくり方であります。だから、社会にはいろんな性格の人がいる。これは誰も反対できませんよ。おるんですから。おらんとは言わせませんからね。おるんですから。また、社会にはいろんな感じ方の人がいる。社会にはいろんな文化を持った人がいる。いろんな考え方や、いろんな立場の人がおる。それが社会だ。その社会の中で生きるということは、自分とは違う性格や、自分とは違う考え方の人と共に生きる。それが社会の中で生きるということの現実である。**

**そして、その社会の中で要求される社会性とはなんなのか。社会性というのは、自分とは違う性格や、自分とは違う考え方や、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きる力のことを社会性があるというのである。自分とは違う性格や、自分とは違う考えや、自分とは違う宗教の人と共に仲よく生きることができないということは、社会性がないのである。社会性がないということは、人間が社会的存在であるとするならば、社会性がないということは、人間性がないのである。人間性がないということは、人間じゃないのである。人間じゃないから、だから、人が殺せるんだ。宗教戦争をして、殺しちゃってる人たちは、原理からいったら、人間じゃないんですね。愛のない人々なんですね。人間性のない人々なんですね。人間性があったならば、そう簡単には人は殺せない。ましてや、人を殺すことに喜びを感じるようなことは、これはあり得ない。人間性がない、人間じゃないから、人を殺すことに喜びを感じることができるのである。人間でありながら、人間ではない神や仏に憧れる。であるが故に、神や仏のために人間を殺すということができる。すなわち、それは人間であることを忘れて、神や仏に憧れるというですね、まあ、そういう間違った意識になってしまってるからである。**

**宗教というものは、人間のためにあるのであって、人間は宗教のためにあるんじゃない。宗教のあるところへ人間が生まれてきたんじゃなくって、人間が生まれてきてから宗教をつくったんだ。宗教は人間のためにある。その宗教によって人間が不幸になってしまったのでは本末転倒だ。宗教故に人を殺すということはですね、これはまさに人間性を見失い、宗教に支配された悲しい人間の自己疎外といわれるですね、そういうこの姿である。とにかくこれからは、宗教が違っても、性格が違っても、考え方が違っても、共に仲よく生きていく力をつくっていかなければならないのが、これからの人類の目標だ。これから個性の時代なんだ。であるが故に、違うから気に入らん。違うから殺し合う。そういうことをやっておったら、もうこれからの時代を生きていくことができる人間ではない。そのことを意味しておる。社会性という観点からですね、愛の本質を考えれば、これは空間論的な愛の本質になるわけですけど、空間論的に愛の本質を考えれば、愛とは他者と共に生きる力である。考え方が違い、宗教が違い、立場が違う、考え方の違う人と共に仲よく生きる力が愛だというふうに言わなければならない。**

**じゃあ、どうしたら考え方が違う人と仲よく生きることができるのか。そのためには、同じ考え方の人間とばっかり付き合っておったんでは、人間は成長しない。そのことをまず考えなければならない。人間が成長するためには、自分にないものを持ってる人から、自分にないものを何か学んで、そして、自分の考えを成長させていく、厳密にしていく、そういうことをしないと人間は成長しない。学校で勉強するというのは、子どもが持っていない知識を持ってる先生から知識を学んで子どもは成長するんですよね。同じ知識を持ってる人とどんだけ付き合っても成長はしません。学校の勉強は、自分が持ってないものを持ってる先生から、自分にないものを学んで子どもは成長していく。それが、まあ、成長の基本原理です。だから、自分が成長しようと思ったら、自分と同じ考え方の人とばっかり付き合っておったらいかん。もちろん、自分と同じ考え方や気の合う仲間と付き合うのも大事ですけども、だが、それは半分でいいんだ。あとの半分は、自分とは違う性格や、自分とは違う考えや、自分とは違うものを持ってる人と付き合って、自分にないものを相手から学んで、そして、自分を成長させていく。そういう部分を半分は、50％は持ってなければならない。その力をつくっていかないと、これからの個性の時代というものを生きることはできない。**

**俺は成長なんかしたくないっちゅう人もおるかもしれませんけど、人間は本来ですね、成長するという、そういうこの命を持って存在しております。命は進化する。命というのは、肉体の成長を求めるだけではなくって、意識の成長、精神の成長をも求めるのである。それが命が成長していくということなんですよね。肉体が成長するだけでは、人間という命の成長ではない。人間という命は、精神と肉体、この両面から考えなければならないし、心の成長も考えなければならない。理性も肉体も心も成長していかないと、人間という命の成長にはならない。実際問題、成長を拒否するっちゅうことは、原理的に言えば、命のあり方に反抗してるようなものでですね、俺は成長したくないっちゅったって、食っちゃ寝、食っちゃ寝しとるだけで、肉体はどんどん成長していくんですからね。成長したくないといったって、成長してしまうんだから、これはもう否応なく、これは成長させられてしまうという力が命に働いてるっちゅうことなんですよね。**

**で、実際問題、子どもというのは、いろんなことを知りたがってですね、知識を求めていく。それが自然な命の姿である。だけど、大人になって、俺は成長なんかしたくない。これは勉強して、いろんなものを学んでいくことが面倒くさくってですね、楽がしたいので、楽がしたい、そういうこの気持ちから成長なんかしたくないわとこういうようなことを言う人もおるんですけれども、それはもう自分で自分を堕落させるようなですね、そういう生き方をしてることになるのであって、それでは本当の人生の幸せや成功は勝ち取ることができません。命の喜びは成長にある。成長しなければ、命は喜ばない。だから、１円でも金をたくさんもろうたらうれしいと思いますからね。ちょっとでも給料が上がったらうれしいと思いますから。それは成長を喜びとする気持ちを持っとるっちゅうことの証明であります。そういう意味で人間は、人間という命は、この成長するということをですね、人間的な生き方として要求されておる。そういう命なんだというふうに言わなければならない。**

**特に人間と動物との違いというのは、動物というのは、本能と遺伝子の支配のもとでしか生きられません。だけど、人間の命は、本能と遺伝子の支配を超えて、自由という領域を獲得した命です。ここに成長するというですね、できないことをできるようにしていくという、そういうこの生き方をする人間的な生き方の特徴があります。人間以外の動植物は、本能と遺伝子の支配のもとで生きる。だから、与えられた現実にどう適応し、どう対応するかということしか生きる道はない。だけど、人間というのは、与えられた現実をどう変えていくかというところに、人間としての生き方の特色がある。それが人間的ということだ。しかも、変えていくっちゅったってですね、よりよい方向に変えていかなければ不幸になりますから、だから、人間というのは、与えられた現実をよりよい方向に、より素晴らしいものに変えていこう。その努力をすることが人間的っちゅうことであります。その結果として歴史がつくられる。歴史というのは、だんだんとより素晴らしくなっていくという、そういうこの流れがですね、歴史をつくるという流れであります。人間は常に現実よりもより素晴らしいことを考えながら、現実をそのより素晴らしい理想に近づけていく。ここに人間的な生き方のですね、基本があるわけである。それがいわゆる成長を望む、成長することをですね、命そのものが求めておるという、そういうこの人間のあり方になるわけですね。その意味で、人間である限りは、人間的に生きようとするならば、成長するしかない。成長を心掛けるしか、人間的に生きる道はない。そういうことが、まあ、言えるわけであります。**

**そういうことを考えてもですね、考え方の違う人と共に仲よく生きていく力をつくっていくという成長をしようと思ったら、どうしたらいいのか。それは、自分にないものを**

**相手から学んで、僕は君と出会えたからこんなに成長できました。ありがとうっちゅうて相手に感謝する。相手から何かを学んで、自分を成長させて、自分の考えをより高度にし、より厳密にし、より素晴らしい考え方に自分の考えを成長させて、そして、君と出会えたので、僕はこんなに成長できました。ありがとう。うれしいと言って、その人に感謝をする。これが個性の時代を生きる基本原理であります。そういう生き方ができる自分というものをこれからつくっていかないと、個性の時代、考え方が違う人と共に仕事をすることはできません。考え方が違う人と共に人生を生きることはできません。相手から学んで自分を成長させて、そして、相手に感謝する。これが個性の時代、互いに違いを認め合って許し合いながら生きていくという、この個性の時代を生きる基本的な生き方であります。それが愛なんだ。愛するとは学ぶことである。相手から学ぼうとしないということは、相手への愛がない。相手から学ぼうとするということは、相手に対する愛がある。まあ、そういうふうにですね、言うことができる。**

**愛するとは学ぶことである。相手から学ぼうとすることが愛だ。そういうふうにですね、考えなければならない。そういうことができたならば、このわれわれは、他者と共に生きる。自分と違うものを持ってる人と共に生きるという、そういう力を自分のものにすることができる。だから、空間論的な観点から言うならばですね、他者と共に生きる力こそ愛だ。同じ考え方の人間としか共に生きていくことができない。これは偽物の愛だ。本当の愛というのは、他者と共に生きる力である。そういうふうにですね、言わなければならない。他者と共に生きる力を持って、初めてわれわれは子孫を残すという、そういう生物学的な目的をも果たすことができるわけであります。それが男が女を愛する、女が男を愛するということの意味である。**

**で、もう１つ、この愛の本質は、時間論的な観点からも考えなければならない。時間論的な観点からの愛とはなんなのか。それは、この愛というのはどういうふうにして出てくるものなのかっちゅったら、まずは愛の根底には、この生殖、セックスというですね、この種族保存の欲求というものが根底に存在する。で、この種族保存の欲求から直接的に出てくるものが恋である。だけど、恋というものは、これは最終的にセックスをして子どもを残すというですね、そういう目的を持っておる心情だ。だけど、愛というものは、決してセックスということが前提されていない。なぜならば、愛には、ただ男女の愛だけじゃなくって、親子の愛もある。また兄弟も愛もある、師弟の愛もある、国を愛することもある、民族を愛することもある、仕事を愛することもある。そこにはセックスという行為は前提されていない。だから、愛というものは、恋よりもより純化された精神的な世界である。そういうふうに考えたならばですね、愛とはなんなのかということを本当にちゃんと見極めようと思ったら、恋と愛との違いというものをちゃんと知る必要がある。**

**だけど、一般的には恋愛といってしまって、恋と愛とをごちゃごちゃにしてしまってるのでですね、恋の終わりが愛の終わりだというふうに思ってる人も案外と多いわけですよね。すなわち、恋しい、恋しいという気持ちがなくなってしまうと、もう俺たちの愛もおしまいだねなんてなことを言ってですね、で、別れてしまったりなんかして。長い恋愛の時代を経過すると、結婚するころにはもう飽きちゃったりなんかしてね、成田離婚になっちゃったりなんかして、結婚する前に別れちゃったりなんかするような、そういうこの愛と恋との違いがわからないが故に、この愛の世界に入れないで、恋の段階で人生、終わってしまうという方もたくさんいらっしゃいます。恋しいという気持ちがなくなってしまうと、愛がなくなってしまったんだと思ってしまってる人が非常に多い。だけど、それは恋愛と一口で言ってしまってるから、その区別ができないのでね、不幸な人生を歩むことになってしまってる人たちなんだ。**

**恋と愛との違いというものをどういうふうに考えるか。恋というのは、これは離れておる男女を結び合わせて、子孫を残させようという目的を持った心情が恋なんですね。恋というのは、離れておる男女を結合させて、子孫を残させるために生じてくる心情が恋です。だから、恋をするとどうなるか。恋をすると必ず相手を理想化し始める。そして、相手を理想化し始めて、そのことによってどんどん好きになっていく。どんどん好きになっていくと、やがてあばたすら、えくぼに見えちゃったりなんかして、あばたもえくぼという状態になってくる。さらにその水準を通り越すと、恋は盲目となって、本当の相手の姿が完全に見えなくなってしまう。もうこんな素晴らしい人はおらんと思ってですね、相手の現実を見ないで、自分の頭の中でつくり上げた理想像を通して相手を見るということをしますから、こんな素晴らしい人はもうおらんと思ってですね、で、結婚したいと思うんですね。で、なぜその恋をすると、あばたがえくぼに見えちゃったり、恋は盲目となって本当の相手の姿が見えなくなるのか。それは、恋というのは、結婚させることを目的にしてますので、相手の本当の姿がちゃんと見えておったら、誰も結婚したいとは思いませんのでね、結婚させなければなりませんから、相手の本当の姿が見えないようにしてしまわないと、結婚したいという気持ちにまで持っていけないんですね。だから、恋は最終的に必ずこの盲にさせられてしまう。相手の本当の姿が見えない状態にさせられてしまうんですね。**

**ところが、結婚するとどうなるか。結婚すると、結婚すればだいたい一つ屋根の下で生活するもんですから、離れていませんからね。離れていませんから、離れていなければ生じない、恋しい、恋しいという心情は、だんだんとしぼんできてしまうんですね。恋しい、恋しいという心情がしぼんでくると、相手を理想化する心情もしぼんできちゃったりなんかしちゃったりなんかして、相手を理想化する心情がしぼんでくるとどうなるかというと、日を追うごとにですね、相手の短所、欠点が目に付いてくる。で、結果としてなんでこんなのと一緒になっちゃったんだろうと思ったりなんかして、反省しちゃったりなんかしてね。で、そうしてる間に、だんだん、だんだん、このあばたがあばたに見え、えくぼがえくぼに見えて、正気に返ってしまうんですね。で、その正気に返ったところから、実は愛が始まるんですよ。これが恋と愛との違いなんだ。**

**恋というのは、まさに『完全無欠のロックンローラー』を愛するようなもんなんですけども、人間を愛するということは、この不完全な存在を愛することなんだ。恋は完全なる欠点のない、そういう存在を愛するところに、恋のですね、その状態があるわけですけども、人間を愛するということは、人間は不完全だ。人間を愛するということは、不完全な存在を愛することなんだ。不完全っちゅうことは、どういうことなのかといったら、人間はどんな人間でも、長所、短所、半分ずつある。だから、人間を愛するということは、長所も短所も愛することである。人間を愛するということは、長所、短所、丸抱えで愛することなんだ。相手の長所しか愛せない、相手の短所は嫌だという人は、人間を人間として愛する資格のない人間だ。長所も短所も丸抱えで愛する。そこにその人を愛してる、その人を愛してるということの意味がある。**

**だから、この人間を愛するためには、短所を愛する力をつくっていかなければならない。もちろん、長所も愛さなければいけませんけども、短所も愛する力をつくっていかなければならない。だから、短所なんか愛せるはずがないやないかとか思うかもしれませんけど、だけども大事なことは、人間の本質は心だ。人間らしい心とは謙虚な心だ。謙虚な心をつくってくれるのは長所じゃない。短所だ。短所がなかったら、人間らしい謙虚な心はできない。だから、人間の本質である心をつくってくれるのは短所だ。そのことがわかったならばですね、われわれは短所の存在を認めなければならない。短所がなくなってしまったら、人間じゃないんだ。だから、短所の存在を認めるっちゅうことはどういうことなのかといったら、短所がなくなったら人間じゃないんだから、まずわれわれは、人間を愛するためには短所の存在を認めて、短所の存在を許さなければならない。短所が許せないようでは、人間を愛してるとは言えない。短所が許せないようでは、その人を愛せない。短所がなくなってしまったら人間ではない。神様だ。だから、人間を愛するということは、長所、短所、丸抱えで愛することなんだ。しかも、短所を愛するとはどういうことなのかといったら、短所の存在を認めて許すことである。そこから「愛するって許すことなのね」というですね、この名文句が生まれてくるわけであります。短所を許すことなしには、人間を愛する力は成長しない。**

**だから、時間論的な観点から言うならばですね、この愛とは短所を許し合う力である。そして、長所と関わる力である。短所を許すだけでは、愛は半分だ。もう１つ、短所を許し合いながら、お互いに長所を発見し合い、長所を褒め合って、長所を伸ばし合う。この全体が愛なんだというふうにこう考えなければならない。そういうふうに考えるとですね、空間論的な愛の本質と時間論的な愛の本質とを統合するならばどうなるかといったら、愛とはなんなのか。愛とは他者と共に生きる力であり、短所を許し合い、長所と関わる力である。これが愛の本質だということが見えてくるわけであります。だから、これからわれわれが愛の能力を成長させよう、愛の力を成長させようと思ったら、まずは他者と共に生きる力をどう成長させるかという努力をしなければならない。愛は努力ですからね、相手のために努力する気持ちがなくなったら、もうその人の愛は消えたんですよ。その人のために努力する気持ちがある限りにおいて、その人への愛は存在する。愛の現実的な実態は努力だ。だから、まずは愛の力を成長させようと思ったら、どうすれば他者と共に生きる力を成長させることができるのかをまず考えなければならない。**

**で、次は、短所を許し合う力を成長させなければならない。で、次には、長所と関わる力を成長させなければならない。どんな人の中からでも、その人の素晴らしいものを見抜いてあげる力を成長させなければ愛はないんだ。こんなやつに長所なんかあるか。それは人間への愛のない言葉であり、人間への愛がないことを意味しておる。どんな人にでも長所は、半分はあるんだ。半分もある長所を、半分も長所があるのにですね、こんなやつに長所なんかあるか。これは完全にもう人間というものに対するですね、この愛がない証明である。どんな人からでも、その人の素晴らしいものを発見してあげる力、これが愛だ。そして、相手の長所を褒めることも愛だ。そして、相手の長所を伸ばしてあげることも愛だ。そういう能力と力をですね、成長させていかないと、愛というものをより素晴らしいものにしていくことはできない。年齢が成長するにしたがって、愛の力がだんだん増していく。そういうふうなですね、愛の文化というものをつくっていくことはできません。**

**そこで今日はですね、どうすれば、そういうこの愛の力を成長させることができるのかという話の第１段階目の話をします。愛の力を成長させようと思ったら、まずはですね、よい人間関係をつくる力というものを成長させなければならない。だけど、よい人間関係をつくる力をですね、持っただけでは、まだ愛は、本当の意味で実力とは言えない。本当に人間の愛があるということを考えるならばですね、けんかなんかしてるのは悲しいじゃないか。人間が殺し合ってるなんて悲しいじゃないか。そういうこの悪くなってしまった人間関係を元のよい人間関係に修復するというふうな力を持たないと、本当に人間への愛がある、本当に愛の力があるとは言えません。もう人間関係、壊れてしまったらもうしょうがないって諦めるようじゃ、人間への愛があるとは言えない。なんとかそれをいい人間関係に修復したいという思いが愛なんだ。それがまたできて、愛の力というんだ。しかも、われわれはこれから、理性によってつくり出された離婚の激増と、幼児の虐待と、高齢者への虐待と、戦争というものを乗り越えていく力をつくっていかなければならない。愛は理屈に勝る力だ。だから、われわれは愛の力をですね、理性に勝る能力に成長させなければならない。われわれは、これから愛の力を理性に勝る問題解決能力を持った、そういう力として成長させていかなければですね、これからの時代を生きていくことはできないんだ。**

**本当に愛を理性に勝る問題解決能力を持った実力というように言うことができるものに成長させようと思ったならば、まずは基本的に、よい人間関係をつくる実力というものをつくっていって、その次に悪化した人間関係を修復する。悪くなってしまった人間関係を元のよい人間関係に戻していく力というものを持たないと、愛は本当の意味で理性に勝る力とは言い難いと。そういう流れでこれからお話をしていくわけなんですけども、今日はこのどうしたら素晴らしい人間関係、よい人間関係をつくり出すことができるのか。その方法論をですね、今日はお話をしたいと思います。次回にこの悪化した人間関係を修復する実力をどうつくるかということをお話をして、で、その次に、じゃあ、最終的に人間にとって真実の愛とはなんなのか。いわゆる人間が愛の努力をすれば、いかなる愛の高みにまで到達することができるのか。人間が到達することができる最高の愛とはなんなのか。それが、まあ、最終的な愛の話の締めくくりであります。そこへ至る、この第２段階目の話が、今日のですね、よい人間関係をつくる実力としての愛をどうつくるかという話になるわけですね。**

**で、まず、そのよい人間関係をつくる実力、よい人間関係をつくる実力としての愛の力を成長させようと思ったならば、まずはどういうことを考えなければならないか。この感性論哲学においては、よい人間関係をつくる実力を成長させていくための方法論が５つあります。その第１番目はなんなのか。第１番目ということは、よい人間関係をつくる力のベースになるもの。一番根底に置かなければならないもの。それが、第１番目ですけど、それはなんなのかというと、人間への深い理解ですね。人間への深い理解。人間への深い理解というものを持っていなければ、よい人間関係をつくる力を成長させることができるはずはないと。じゃあ、人間への深い理解とはなんなのか。人間への深い理解というのは、原理的には２つあります。人間を深く理解するための原理は２つある。１つはなんなのか。第１番目はなんなのかといったら、人間はどんな人間でも、長所、短所を半分ずつ持っておる。長所も半分、短所も半分、それがすべての人間が逃れることができない宿命であります。人間はどんな人でも長所半分、短所半分である。長所というのは、他人から好かれるところ。短所というのは、他人から嫌われるところ。どんな人間でも、それを半分ずつ持っておるんだ。**

**なぜそんなことが言えるのかと。それは人間も宇宙の中に存在する。だから、人間は宇宙の摂理から逃れることはできないと。宇宙の摂理とはなんなのか。宇宙の摂理というのは、マイナスに評価されるエネルギーとプラスに評価されるエネルギーが、エネルギーバランスを模索しながら宇宙の秩序をつくってる。これを宇宙の摂理というんですね。だから、物理の教科書では、宇宙とはエネルギーバランスであると書いてあります。すなわち、宇宙というのは、マイナスエネルギーとプラスエネルギーがバランスを模索しながら宇宙の秩序を保ってるんですね。それを摂理というんですね。人間は寝ておっても生きておる。生きてるということは、自分で生きとるんじゃない。寝ておっても生きてるということは、宇宙の摂理の力によって一人一人の人間は生かされてるんだ。寝ておっても死なない。寝ておっても心臓は動いてるし、寝ておっても呼吸してるし、寝ておっても地球は回ってるし、いわゆる命というのは自分で保ってるんじゃない。命を保ち、命を生かしてくれる力は宇宙だ。宇宙の摂理の力がですね、この人間を生かしてくれてるという、そういう状態でわれわれは生きてるわけであります。**

**であるが故に、確実にわれわれの命は宇宙の摂理の力によって支配されてるんだ。われわれの命には宇宙の摂理が働いてるんだ。その摂理とはなんなのかといったら、このマイナスとプラスが互いにバランスを取ってですね、そしてこの命を維持するという働きであります。だから、人間の肉体もだいたいこの左右シンメトリーに近い構造になってますし、神経系も交感神経、副交感神経という構造になってますし、また、あらゆる生きるこの力のですね、根底には、バランス作用、調和作用、平衡作用というね、そういう働きがあって、自然治癒力というのでもバランスを取って、空腹と満腹でバランスを取ってですね、この命の正常なあり方を保ち、つくっておる。それを考えるならばですね、この宇宙の中に存在するあらゆるものの基本的なあり方は、このバランス作用、調和作用、平衡作用という、そういう働きである。バランスを取るためには、両極端の原理がなければならない。交感神経、副交感神経みたいに、心臓の働きを早くするのと、心臓の働きをゆっくりさせるのと、それが互いにバランスを取りながら、その状況に合わせて働いてる。そういう構造が命にはあってですね、それが宇宙にもありまして、宇宙を見ればですね、光には影がある、表には裏がある、善には悪がある、美には醜がある、真には偽がある、陰には陽がある、清には濁がある、上には下、右には左、前には後ろ、宇宙構造というのは必ず一対という、対という原理をもって存在してるんだ。これが宇宙の摂理だ。**

**だから、人間というこの宇宙の中に存在するものもですね、必ずそういうこの摂理というものの支配のもとでしか生きられない。だから、人間性というものも必ずそういう一対のものがバランスを取る構造になっておる。だから、人間性は、長所、短所、半分ずつあるという構造にならざるを得ないんだ。だから、世間でどんな立派な人と言われてですね、尊敬されてる人でもね、長く付き合ったらね、必ずどんな立派な人の中にも、長く付き合ったら、ここのところは嫌だなと思う部分が半分は出てくるんですよ。だから、どんなに世間で尊敬されてる人でもね、その家の奥さんに聞いたりね、その家の子どもに聞いたらね、あんな人っちゅうことになってしまって、普通の人になってしまうんですよ。みんな人間というのは、どんな人間でも、いいところも半分あるけど、悪いところも必ず半分なかったら人間じゃない。どんな人間でも、長所、短所は半分ずつあるんだ。それをちゃんと知っていないと、よい人間関係はつくれません。相手の中になんかちょっとでも嫌なところを発見したら、もう嫌やって思うようでは、その人を人間として認めてないんだ。半分短所があって人間なんだ。半分も短所があっていいんだ。もちろん、半分は長所なんですけどもね、だけど、半分も短所があっていいんだ。そうでなかったら、人間じゃないんだ。自分が嫌だと思うところが相手の中に半分あってもですね、それを許すことがその人への愛なんだ。自分が嫌だと思うところが相手の中に半分あることを認められない、許せない人は、人間を人間として愛する資格のない人だ。相手に人間ではないものになれと言ってることになってしまう。**

**だけども、短所というものは、出てくると嫌われますのでね、短所はなくなりませんけども、だけども、短所が出てくると嫌われますから、だから、あんまり短所が出てこないように注意をする。それが相手への思いやりだ。それが愛だ。短所は半分あってええんやといって、開き直ってしまっちゃったりなんかしてですね、短所をどんどん、むやみに出しておるようじゃ、これはこの他人への思いやりがない。短所はなくならないけども、なくなったら人間じゃない。なくならないけども、短所が出てきたら嫌われますから、とにかくは。だから、短所が出てこないように注意をするのが愛だ。それは相手への思いやりだ。だけども、短所はなくならないんだ。相手の中に短所があると思うから、相手の中に嫌なところがあると思うからね、なんとなく嫌で許せないんですけども、相手から見たら、必ず自分の中にもね、短所が半分あるんですよ。あの人に、これさえなかったら、本当にええ人なんだけどなという、これしかなかったらっちゅうものは、みんな、どんな人にもあるわけですよね。それがあるんで嫌なんだっていうところがみんなあって人間なんですよね。**

**これがなかったらええのにという、そのこれがなかったらというものをですね、なくさせようとするんじゃなくって、それがあることを認めて許すことが人間への愛なんですよ。その力が出てこないと、個性の時代というのはとても生きられません。だけども、短所はあるんだといって、むやみに出してしまったら、これは人間関係を崩壊しますのでね、自分としてはできるだけ短所が出てこないように注意をする。これが愛だ。だけども、短所はなくならないんだ。短所をなくそうとすると病気になる。短所はなくならない。なくならないものをなくそうとしても無駄なんで、無駄な努力、無理な努力になりますから、無理しますから、病気になる。短所をなくす努力はしたらいかん。大事なことは、伸びる長所を伸ばすことだ。短所はなくならないんだから、なくならない短所をなくすようなばかな努力は自分はしたらいかん。自分がするべきことは、短所をなくすんじゃなくて、長所を伸ばすことなんだ。長所というのは、人よりも優れてるところで、しかも、人よりも少ない努力でぐんぐん伸びる。それが長所だ。そして、よい人間関係をつくろうと思ったら、自分の長所を伸ばして、長所っちゅうのは他人から好かれるところですからね。他人の好かれるところ、長所をどんどん伸ばして、そして、この他人からますます好かれるようになっていく。そういうこの好かれる部分を成長させる。短所は努力してもなくならないんだから、短所は努力する必要がない。**

**で、長所をどんどん伸ばしていくとどうなるかといったら、長所がどんどん伸びていってですね、長所が他人から一目置かれるような、そういうこの能力になってくると、短所は放っておいても人間の味に変わる。人間味になってくる。あんなすごい力を持ってるのに、こんなところもあって面白いね。なんか愉快だね。なんか親しみが湧くねという、そういう感じになってきてですね、いい、素晴らしい長所を持ってると、短所があるが故に人から愛されるというかですね、何かしら親しみを持ってもらえるという、そういうことになってくるわけですね。長所を伸ばせなければ、短所は単なる短所ですけども、長所を伸ばすことによって、短所は人間の味、人間味に変わる。これがこの人間の命が持っておるダイナミズムというものであって、短所は単なる短所ではない。短所もひっくり返せば長所になる可能性があるというね、そういうところがあったりなんかしますので、とにかくは、この長所をまずとことん伸ばすことがですね、この短所に対する対応方法として大事なことです。**

**しかも、長所を伸ばすというのは、いったいどこまで伸ばせばよいのか。それは、仕事をして金をもらうからにはですね、素人から見て、さすがにプロですねと言ってもらえるところまで、まず自分の力を伸ばさなければならない。素人から見て、さすがと言ってもらえないような半端な力で金を取ろうなんて、おこがましい話だと。金を取って、人から金を取って仕事をしていくんだから、その力はやっぱり素人から見てさすがと言ってもらえる、その力をつくってなければ恥ずかしくて、金なんか取れない。まずはこの社会に出て、この仕事をしていくからには、まず自分の長所をですね、他人から見てさすがと言ってもらえるところまで伸ばすことが、まずは最低限度の目標である。またその上に日本一がある。またその上に、世界一があるんだ。仕事をして金を取るからには、人からさすがと言ってもらえないような、半端な力で金を取ろうなんていうようなことはおこがましい。堂々と金が取れん。恥ずかしくて金なんかもらえへん。金を取るんやったら、やっぱり相手が気持ちよく金を出してくれるようなですね、さすがと言われる、その金を惜しまずに出してもらえる力をですね、つくらないとプロとは言えない。金を取るんだから、金をもらわなかったら、半端な力でも結構ですけど、金を取るからには、それだけの価値がなかったらいかん。それがさすがと言われる水準ですよ。さすがにプロ、それが仕事をしていく上での最低基準のですね、この能力であります。**

**まずはそこまで長所を伸ばすという努力をしなければならない。そのことによって、人から求められ、人から必要とされて愛される。他人と関わる場合でも、相手の長所を伸ばしてあげるという、そういうこの関わり方をすることが愛だ。短所はなくならないんだから、短所をなくさせようとすることは相手を苦しめることだ。だけども、大事なことは、短所はなくならないけども、出てきたら嫌われるから、短所があんまり出てこないように注意を払う。これはこの人間としてですね、相手への思いやりとして、生き方の品格として、これは非常に大事な課題であります。短所が出てきたら嫌われる。嫌われたら仕事にならん。だから、あんまり短所は出てこないように注意をする。だけど、短所はなくなりません。なぜなくならないのかといったら、短所こそ人間の本質である心をつくってくれる原理だからだ。短所がなくなったら、人間らしい心は生まれない。だから、学校教育でですね、短所をなくしましょうねと、長所は長所でいいんですから、短所をなくしましょうねと言ってるから、だんだん、だんだん、心が死んでしまう。俺には短所があるんだということをちゃんと知ってることによって、人間らしい心が生まれてくるのにですね、短所をなくしましょうね。長所ばっかりになるようなことをですね、言われるから、傲慢になるっきゃない。自己中心的でわがまま放題になるっきゃない。**

**自分の短所は自分で自覚できませんから、謙虚さなんて吹っ飛んでしまう。心遣いなんて全然できなくなってしまう。これが学校教育の弊害ですよね。わがまま放題の人間をつくってしまう。全然心遣いができない。相手が気分を悪くしておっても、全然それに気が付かない。心の働きがなくなってしまう。これが理性ばっかり成長させられてですね、短所をなくしましょうという教育をされてしまった人間性のゆがみですね。短所がなかったら人間じゃない。短所があることがわかっておって、初めて人間になれる。自分の短所はこうですとわかっておるからですね、だから、その短所があまり出てこないように注意もできる。短所をなくしましょうって、短所がなくなっちゃったみたいなですね、短所にあまり意識を向けないようなですね、そういうふうなことで短所をなくしましょうという努力をしてるとですね、だんだんとこの短所というものは自分自身で意識できなくなってしまって、長所ばっかりに意識がいってしまう。短所を自覚して謙虚になるという、そういう心がなくなってしまうんですね。しかも、短所をなくしましょうという努力をすれば、長所は伸びません。長所が伸びないから、平凡な人間で終わってしまう。なんの価値もない、なんの存在価値もない、なんの存在感もない、普通のこの十把一絡げの人間で終わってしまう。それでは個性の時代は生きられません。**

**個性の時代というのは、一人一人がですね、個性的な能力を発揮して、そして輝くというのがですね、個性の時代の生き方であり、また個性の時代の教育である。一人一人が独特の能力を発揮して、そして、一人一人がその個性ある能力を輝かせて生きるという、それが、個性の時代を生きる人間の姿であって、そういうこの人間をつくることが個性の時代の教育なんですね。だから、長所を見つけ出して、長所を伸ばしてあげて、長所を輝かせてあげる。いっときでも早く、その人の中にですね、さすがと言われるものをつくってあげる。そういう教育をですね、学校も、また社員教育もしなければならない。短所をなくさせるよりは、長所を伸ばすことに専念させていく。そして、短所はなくすんじゃなくて、短所はあるんだということを忘れないようにさせる。その代わり、長所をぐんぐん伸ばしていく。そういうこの形のですね、教育の仕方というものを考えなければ、その人の命を生かし切るようなですね、そういうこの扱い方というか、社員教育はできません。**

**まあ、とにかく人間には、どんな人間でも、長所、短所、半分ずつある。長所も短所も半分ずつあってなくならない。長所もなくならない。短所もなくならない。どんな人にでもいいところが半分ある。悪いところが半分ある。それをどういうふうにですね、それを取り扱って、そして、この素晴らしい人間関係をつくっていくという、そういうこのことをするか。それを考えなければならないんですね。短所が半分あるんだから、あっていいんだという、ただそういう開き直りというか、そういう科学的な認識で終わってしまっては、これは駄目になりますから、そういう科学的認識じゃなくって、短所と長所が半分ずつある。だけども、短所が出てきたら嫌われる。だから、短所があんまり出てこないように注意はせんないかん。だけど、短所をなくす努力はしたらいかん。まあ、ここに哲学があるわけですね。科学は事実の認識ですから、長所、短所が半分ずつあるんだで終わってしまう。だけど、哲学はそれをどう生かすかを考える。哲学は、意味や価値を与えるところにその学問の価値があるのでね、短所をどう生かすか、長所をどう生かすか、それをどう扱うか。そこに哲学というこの学問の価値が出てくるわけですね。**

**短所をなくそうとするのは、これはマイナスの対処方法であります。科学は長所と短所が半分ずつあるという認識で終わってしまう。だから、短所はいかんと思って、なくそうとすれば、それはマイナスのこの対応の仕方だ。短所はなくならない。だから、短所をどう生かすかということを考えにゃいかん。短所を生かすためには、自分の短所があることをわかって、そして謙虚な心をつくっていく。それが人間になる道であると。だけど、短所があんまり出てきたら嫌われるから、出てこないように注意をする。これも大事な短所に対する対応方法だと。だけど、短所ばっかりのことを考えとったらいかんので、大事なことは短所よりも長所だと。とにかく長所をどんどん伸ばしていって、さすがにプロと言われる水準のものを自分の中にどんだけつくるか。それがその人間の価値だ。いっときでも早くね、そういう他人から一目置かれるものをつくらないと、人生はさみしいです。全然他人から注目されない。全然この存在感がですね、ないというふうな、そういうことでは、人生は楽しくありません。**

**で、この人間への深い理解のもう１つ大事なことはなんなのか。もう１つはですね、人間は、人間の本質は心ですので、みんな心が欲しい。みんな、自分の心を本当に満たしてくれるものを求めておるんだ。それがこの第２番目のですね、人間への深い理解ですね。人間、どんな人間でも、この自分の心を本当に納得させてくれるもの。自分の心を本当に満たしてくれるものを人間、みんな求めて生きておるのである。もう今の時代の人々は、ほとんどですね、理屈じゃない、心が欲しいというね、そういう叫びをみんな持っておる。もう理屈はたくさんだと。もうかえって理屈を言われるとむかついてくると。心が欲しいと。とにかく人間はみんな、心を求めておるんだから、だから、心をあげなければならないんだ。じゃないと、いい人間関係はできない。みんな、心を求めておるのに、理屈をあげてるから駄目になるんですね。夫婦の関係でも、心を求めてるのにですね、理屈で言って聞かせたりですね、理屈で言い訳したりですね、それで大げんかになるんですよ。理屈が入るとけんかになるんだ。心が欲しいんだ。だから、心をあげればいいんだ。**

**とにかく人間はみんな、その自分の心を本当に満たしてくれるものを求めておるんだ。だけど、人間は不完全だ。みんな人間は自分の心を満たすものを求めておるんだけど、人間は不完全だ。であるが故に、その心は決して満たされきることがない。人間は不完全だから、心を求めていながらも、その心は決して満たされきることがない。満たされきることがないからどうかっちゅったら、人間はみんな満たされない心を抱えて生きておる、心寂しき存在である。人間はどんな人間でも、満たされない心を抱えて生きておる存在なんだ。それは不完全なるが故に致し方がない。その心は決して満たされきることはない。満たされきることがないから、だから人間は満たされない心を抱えて生きてる心寂しき存在である。どんな人の心の中にもですね、俺のことなんか誰も本当にわかってくれてない。私のことなんか本当にわかってくれてる人、誰もおらん。そういう孤独な魂の叫びがある。どんな人の心の中にも孤独な魂の叫びがある。だけど、うっかりすると、それは自分だけやと思ってしまってですね、ついつい子どもは、お父さん、お母さんに、なんでお父さん、お母さんは俺のこの苦しさがわかってくれへんねや。そういうこの反抗的な姿勢になるわけですよね。**

**だけど、誰にもわかってもらえないつらさを抱えて生きておるのは自分だけやない。お父さんもそうなんだ。お父さんも、俺のことなんか本当には誰もわかってくれてへん。女房も子どもも、俺のことなんか、本当には心配してくれてへん。俺のことなんか、本当には誰もわかってくれてない。そういう孤独な魂の叫びを発しながらも、お父さんはそれに耐えて、頑張って生きてるのが現実だ。お母さんもそうだ。お母さんもやっぱり、私のことなんか本当には誰にもわかってもらえてないわ。親にも、主人にも、子どもにも、私の本当のつらさなんて、このさみしさなんて、本当には誰もわかってもらってない。そういう孤独な魂をみんな持ちながら、それに耐えて、頑張って生きてる。それがお母さんだ。俺のことなんか、誰もわかってくれてない。いかにもそれは自分だけのような、そういうこの気持ちで、そういう気持ちになりますけど、本当はそうやない。みんなそうなんだ。みんな、俺のことなんか誰もわかってくれてないって、そういう思いでみんな生きとるんだ。誰一人、満たされた心を持って生きてる人間は誰もいない。それが不完全なる人間の、また逃れ難い宿命である。**

**じゃあ、なんでいったい人間は、孤独な魂の叫びを発せざるを得ないのか。それは、人間における実質的な本質が意志と愛であるからである。人間には、みんな意志と愛がある。意志があるから、人間はどんな人間でも、みんな認めてもらいたい。わかってもらいたい。褒められたいんだ。また、人間には愛がある。だから、どんな人間でもみんな愛されたいんだ。どんな犯罪者でも愛されたいんだ。どんな犯罪者でも認めてもらいたい、わかってもらいたいんだ。みんな愛されたい、認めてもらいたいという気持ちを持って、生きて死んでいく。みんな愛されたい、認めてもらいたいと思ってるんだけども、誰も自分が求めるようには認めてくれないし、誰も自分が求めるようには愛してくれない。それがまた悲しいかな、現実だ。愛においてもですね、どんなに激しい恋愛のさなかにあってもね、決してこういうふうに愛してくれたらなと思うようには、相手は愛してくれない。どんなにお父さん、お母さんが子どもを愛しておっても、子どもから見たら、お父さん、お母さんなんて、全然、俺のことなんかわかってへん。それが現実なんだ。みんな愛されたい、認めてもらいたいと思いながらも、誰も自分が求めるようには愛してもらってない。誰も自分が求めるようには認めてもらえてない。これはすべての人間に共通することなんだ。俺だけじゃないんだ。みんなそうなんだ。**

**お父さんだってそう、お母さんだってそう、おじいちゃん、おばあちゃんだってそうなんだ。自分だけじゃない。全部がそうなんだ。なんで俺のことをわかってくれてへんのやっていって、自分が文句を言ってる相手でも、相手もそうなの。相手もなんで俺のことをわかってくれへんのやとこう思ってるわけですよね。お互いにそうなんだ。だからどうか、だからどうかといったら、人間、どんな人間でもね、みんな愛されたい、認めてもらいたいと思ってるんだから、その気持ちにどの程度、応えてあげられるかによって、人間関係は決まるんだというふうに言わなければならない。みんな愛されたいんだ。みんな認めてもらいたいんだ。みんな褒めてもらいたいんだ。だから、その気持ちにさえ応えてあげることができたならば、仲よくなれない人間はいない。どんな悪人とだって、仲よくなれる。どんな人とだって、仲よくなれる。仲よくなれない人間はいないんだ。みんな愛されたい、認めてもらいたいんだ。その心にさえ応えてあげたならば、素晴らしい人間関係はいくらでもできるんだ。**

**だけど、なかなかこの相手がですね、愛されたい、認めてもらいたいという、その気持ちを持っておるということに気付かないで、ついつい理屈で対してるというですね、そういうことが非常にこの現実的には多いです。心が欲しいとはいったい何が欲しいのか。それはこの愛されたい、認めてもらいたいということなんですよね。心が欲しいということは。だから、まずこの部下に対する場合でもですね、やってないことを先に言ってしまっては、これは仕事をする気がなくなってしまう。まずやってくれたことを褒めて、感謝して、それを認めてあげて、それからやってもらいたいことを付け加えるという、その順序を忘れてしまうと、人間関係はうまくいきませんし、またこの仕事の能率も下がってきます。まずやってくれたことに感謝して、それからやってくれてないことを注文してやってもらう。そういう順序をですね、忘れたらいかん。これが、人間の深い理解というものをもってですね、この部下に接するという、そういうふうなこのやり方であります。ほとんど、やってくれたことに感謝するという、この心が欲しいということに対応する、対応を忘れてしまって、まずはやってないところのことを先に言ってしまうというところにですね、このやる気をなくさせる、そういうふうなですね、あるいは、失敗したらいかんというような気持ちにこうさせられてしまって、そして、この事なかれ主義に陥ってしまうというようなね、そういう状態をつくってしまう原因があります。**

**これは非常に大事なですね、この人間関係の基本の問題なんだ。とにかく、まずは心が欲しいんだから、心をあげないと、その次へは進めないと。これは昔から言われてる武士道の精神の中にある言葉ですけど、「士は己を知る者のために死す」。士は己を知る者のために、士というのは男ということですけど、人間というふうに置き換えてもいい。人間は本当に自分のことをわかってくれる人が出てきたなら、もうこの人のためだったら、俺は死んでもいいと思えるぐらい感動し、感じ入り、その人に惚れるもんだというんですね。士は己を知る者の為に死す。本当に自分のことをちゃんとわかってくれる人が出てきたなら、もう俺はこの人のためにだったらなんでもしたる。この人のためだったら死んでもいい。そういう思いになるのが人間だというのがですね、「士は己を知る者の為に死す」。士というのは、これは武士の士。武士の士という字を書いてね、「士は己を知る者の為に死す」。自分のことを本当にわかってくれる人が出てきたならば、もうその人のために死んでもいいと思ってしまう。それが人間の心だと。それほどまでに人間というのは、愛されたい、認めてもらいたいんですね。その愛されたい、認めてもらいたいという心にさえ応えてあげることができるならば、人間関係は、ほとんどうまくいってしまう。**

**ところが、みんな理屈で言って聞かせたり、理屈で言い訳したり、理屈で対立するから、理屈で対応するから、だから、この心をわかってもらえない、心が通じ合わないということで、このむかつき始めるわけですね。これは、理性を原理にした人間観と、感性を原理にした人間観の大きな違いです。感性論哲学は心を優先させる。理性はその次だと。理性の哲学は、まず理屈を優先させる。そして、心を配慮することを忘れてしまう。理屈さえ通ればうまくいくんだと思ってしまうのが理性なんですね。それは人間の本質は理性だと考える、そういう人間観の結果である。人間の本質は理性じゃない。心なんだ。心さえ通ればすべてがうまくいくんだというのが感性論哲学ですね。それが人間の本質は心だという時代の人間に対する対応の仕方であります。とにかく心が大事なんだ。理屈も、もちろん大事だけど、優先させるべきは心である。理屈がなかったら人間ではない。あとから理屈は付け加えなければ、人間ではない。だけど、理屈を優先させたら、人間は壊れる。そういうこの人間に対する、人間観の変化というものをですね、早く読み取らないと、素晴らしい人間関係をつくっていくという、理屈を超えたですね、理屈を超えた素晴らしい人間関係をつくっていくという力を、われわれは自分のものにすることはできません。**

**とにかく、まずこのよい人間関係をつくる実力というものを求めていこうと思ったら、この人間への深い理解、人間観の変革、人間の本質は理性だという、そういう理性、人間観から、人間の本質は心だというね、感性だという、そういうこの人間観へと、自分の意識を転換させることがですね、これからの時代において、よい人間関係をつくる実力を成長させるための、まず第１原則です。というところで、休憩に入りたいと思います。10分間ほど休憩を入れます。どうもありがとうございました。**

**（休憩）**

**芳村：それでは、後半の話に入りたいと思います。よい人間関係をつくる、この愛の実力、第２番目ですね。第２番目は、謙虚な理性という課題であります。最初に申し上げましたように、あまりにもまだまだですね、今の人類は理性的に傲慢過ぎるというところがあります。で、理性というのは、真理は一つと考えるし、矛盾を排除する。矛盾というのは違うものを排除するというですね、そういうこの働きをしますので、どうしてもですね、理性的になればなるほど、対立が生じやすいという、まあ、そういうことになります。対立が生じ易ければ、当然のことから、人間関係は悪化しやすいと。理性的になればなるほど、この人間関係は壊れやすい。それが現実ですよね。実際問題、離婚の激増もこの違いを理由に別れるわけですしね。幼児の虐待も親が自分の言うことを子どもが聞かないとむかつくっちゅうてですね、憎たらしいっちゅって、言うことを聞かそうとするのが幼児虐待ですからね。そういうことで、とにかくはこのもっともっとわれわれは、理性というこの能力においてですね、謙虚になるという、そういう精神をつくっていかないと、これからの個性の時代においてですね、素晴らしい、いい人間関係をつくっていく力を成長させることはできません。**

**だけど、まだまだ人類はですね、この理性は絶対なもんだと。人間は不完全だ。理性は完全だ。だから人間は理性に従わなければならないという、そういう意識でですね、この理性に支配され、この理性的な生き方をしてる人が非常に多いです。だけども、この理性の時代である近代からですね、この次の新しい時代である感性の時代へと人間性を成長させていこうと思ったならば、われわれはいつまでも理性に対するこの信頼の念を持っておってはならない。われわれ、いつまでも理性の盲信に陥ってはならない。もちろん、理性も大事なんですけど、理性も大事なんだけど、理性の限界というものをちゃんと知りながらですね、理性を使うということをしないと、理性を使うがためにね、人間関係を破壊し、理性を使うがために、間違いが生じるというですね、そういうふうな状況に陥ってしまうことが非常に多いです。**

**建築においてもですね、最近は理性的な計算で建築をしますので、多くの場合ですね、その理性的な構造物というのは、ちょっとした変動に弱くって、破壊、崩壊する場合が多い。だけども、従来、日本が伝統的につくってきた木造建築はですね、この理性的な計算でつくられたものではなくって、感性の勘とコツで、この木組みという仕方でですね、つくられた建築であった。であるが故に、この勘とコツでできあがってくる建築であるが故にですね、その建物に感性があって、建物が感じる力を持っておって、地震でも台風でも、建物自身がですね、その変動に耐えようとする、そういうふうなこの力を持つわけですね。ところが、理性でつくられた建造物というのは、ちゃんと計算でつくられてしまってるが故に、ちょっとした誤差が大きなこの崩壊に結び付くようなことがあったりなんかして、そういうこの問題点も出てくるわけであります。まあ、そういうことを考えてもですね、われわれは理性という能力が持っておる限界というものを知りながら、理性を使いこなしていくというですね、そういう力を持たなければならない。**

**人間は理性に支配されてはならない。理性と能力は、この人間の持っておる能力の一部分である。理性というのは、この人間の肉体の中の脳という肉体に限定された能力が理性であります。人間も理性を持ってますけど、理性だけじゃない。人間には理性のほかに感性もあり、肉体もある。人間は理性よりもより複雑は存在であり、人間は理性よりもより高度な存在であり、高次元の存在である。人間はイコール理性ではない。人間は理性のような単純な単次元のですね、存在ではない。人間は理性よりも高次元の存在である。人間は理性もあるけど、感性も肉体も持ってる。次元が高い。もっと理性よりも複雑な存在なんだ。もっと理性よりも高度な存在なんだ。理性なんかに支配されてはならない存在なんだ。人間は理性を、自分の能力の一つとして支配して、使いこなすというですね、そういうこの意識で理性に関わらなければならない。そのためには、これまで人類がですね、この理性に支配されてきた、そういうこの状況を逆転させる必要がある。すなわち、理性というものがどういう能力なのか。もう一度ちゃんとですね、考え直してみる。そういうことを、その時期を今、迎えておるんですね。**

**実際問題、もうこれ以上、人間は理性化されてはならない。これ以上、理性教育を続けていったならば、離婚の激増はますます増え続ける。幼児の虐待もますます増え続ける。そして、戦争はなくならないと。もう、もはやわれわれは理性能力を成長させることをですね、やめなければならない。そういう状況に今、なってきてるわけですね。理性教育をして、理性能力をこれ以上、成長させることをやっておったならば、人類は滅亡する。まあ、そういう危機感を感じておるのが現実の社会であります。だから、どんどん子どもたちは学校を去っていく。すなわち、理性を成長させる教育の現場から逃れていって、心が欲しい、心が欲しいと叫んでおる。そして、心を成長させてくれる、心を豊かにしてくれる、愛の教育を求めてですね、子どもたちは今の学校を去っていってしまっている。それが現状であります。そして、一般的に認められておるですね、この公立学校ではなくって、そういう退学者ですね、不登校児と自閉症児ばかり集めたようなですね、学校が非常にたくさんでき始めております。で、そういう学校ではですね、君たちこそまさにこれからの時代の指導者だっていって、この自閉症児と不登校児を育てておるんですね。完全にもう人間教育の方向性が、社会全体から言えば、転換し始めております。**

**その意味においても、いつまでも理性を頼りにして、理性を原理にして、理性しか信じることができるものはないというふうな間違った人間観をいつまでも持っておってはならない。だけど、理性は人間が使わなければならない。理性を使わないと、人間は人間になれない重要な能力だ。だから、その理性能力の限界というものをちゃんと知りながらですね、理性を正しく使うという、そういう能力をつくっていかなければならないような、そういう段階に入ってきておるわけですね。だけど、まだまだ、いわゆる学者といわれてるような方々はですね、理性しか信じることができないものはない。そういうふうにこう思ってしまってですね、そして、その理性の絶対性や完全性を信じながら研究をしてるというのが、まずは現状であります。だけども、ぼつぼつそういう理性しか信じられないというふうな、そういうこの学者だけではなくってですね、理屈を超えた世界に大きな関心を持って、そして、この人類の人間性なり、人類の能力をもっと素晴らしい、もっと優れたものにしていこうとするような、そういうこの考え方をね、持って、研究をしてらっしゃる学者もたくさん、まあ、出てきておるわけですよね。**

**理屈を超える世界というのは、いってみれば、霊的な世界ということもそうですし、超能力とかいわれるような世界もそうですしね。それから、霊気というね、そういうこのいわゆる気とかですね、そういうこの世界もそうですし、そういうこの、これまでは科学的にはあまり問題にされなかったようなこの世界に対して、大きなこの関心を持って研究をしてらっしゃる方もどんどん増えてきております。それが、この理性の限界というものをだんだんと人類に知らしめるような、まあ、そういうこの結果になってきてるわけですね。**

**じゃあ、理性というものをわれわれはどういうふうにですね、考えれば、これからの個性の時代を生きていくことができるのか。この理性と能力がですね、どういうふうにして出てくるのかということをまず知る必要があるわけですけども、われわれは、おぎゃあと生まれたときにはですね、脳を持って生まれてくる。だけど、脳というのは、これは肉体の一部分なんですよね。で、脳細胞というのは、だいたい、140億個ぐらいあるんだといわれてますけども、脳というのは肉体であって、脳は理性ではない。脳は精神ではない。脳は肉体だ。で、脳という肉体がですね、考えるという力を持つためには、どういう順序が必要なのかといったらですね、まず脳が人間がつくった言葉を覚えなければならない。脳が言葉を覚えて、言葉と言葉とを事実に合うように結び付けていくという作業をすると、合理的に考えるという理性が出てくるわけですね。それが理性なの。理性という能力は、人間が生まれながらに持って出てくるもんじゃない。後天的に自ら努力してつくり出していく人間的な能力で、人間しか持っていない。人間しか持っていないから、だから、不完全な能力なんだ。**

**決して理性は、先天的に神から人間に与えられた能力ではない。このことが1920年にインドで発見された、オオカミ少女の例によって実証されたわけですね。オオカミ少女というのは、約３カ月のころ、オオカミにさらわれて、６歳ぐらいで発見されたというふうにいわれておりますけども、もう人間の子どもに生まれてきてもですね、ちっちゃい、だから、オオカミの社会の中で生活してると、脳がオオカミの習性を覚えてしまってですね、そして、もう人間には戻れないという状態になってしまうんですね。ですから、オオカミ少女として発見された女の子２人なんですけども、片方の子はすぐ死んでしまって、片方の子は10年ぐらい生きておって、その間になんとか人間に戻そうとする努力をいろんな学者が代わってしたんですけども、結果としてはこの人間に戻そうとする努力がストレスになってしまって、16～17歳で死んでしまったといわれております。**

**すなわち、人間の子どもに生まれてきてもですね、人間の言葉を覚えさせられて、言葉と言葉とを事実に合うように結び付けるという、この方法論をちゃんと教えられないとですね、理性という能力は出てこないわけですね。もし理性という能力が、生まれながらに命が持っておる潜在能力であったとするならば、潜在する能力であったとするならば、例えオオカミに育てられてもですね、その潜在するものがあったならば、それを引き出そうと思ったら出てこなければならない。だけど、いかに努力をしても出てこなかった。ということは、なかったんだ。そういうところからですね、理性という能力は、神から人間に与えられた能力ではない。生まれてから後に人間が自ら努力をしてつくり出す能力なんだ。だから、人間しか持ってない、人間的能力なんだ。不完全な能力なんだ。そのことがですね、このオオカミ少女の例によってだんだんわかってくることになってきました。**

**だから、理性というものをわれわれはどういうふうに考えなきゃならんかといったら、これまでは、理性という能力は合理的に考えることができる素晴らしい能力だ。今、神秘だといわれることも、理性能力を間違いなく使うならば、将来は必ず解明されてですね、全部わかってしまうだろうというふうに、こう思われておったんですよね。だけども、この理性の限界というものをですね、どういうふうにこの表現することができるのかと申しますとですね、理性は確かに合理的に考えることができる素晴らしい能力だ。だけども、残念ながら理性は、合理的にしか考えることができない能力である。そこに理性の限界があるんだ。そういうふうなですね、この意識で理性を使う必要がある。理性は合理的にしか考えることができないんだ。だから、合理を超えた勘とコツがこれからの時代においては大きな価値を持ってくる。そういうふうなことがですね、この見えてくるわけであります。**

**実際問題、今もう世界ではですね、合理的な科学捜査ではなくって、霊能者を使ってですね、犯人を捜し当てるというようなことも、アメリカやソ連ではやってますし、また、霊能力をどういうふうにすれば軍事利用できるかということすら、欧米では研究してるという機関があるわけですね。それほどにもう理性には限界があるということがはっきりと認識されるような段階になってきました。哲学の世界においてはですね、理性批判の哲学というのは、もう19世紀中頃から出てきてるわけですね。これは、哲学の流派としては、実存哲学というふうにいわれる哲学ですけども、理性という原理をですね、理性の能力に問題があるというね、そういうことに気付いて、理性批判の哲学というものを展開したのがこの実存哲学ですけど、その流れの中から、この理性の抑圧によってあらゆる病気が生じ、理性による本能のエネルギーの抑圧が精神病の原因なんだというようなことを言う、ジークムント・フロイトも出てきましたしね。また、1931年には、クルト・ゲーデルという数学者がですね、「理性の不完全性の証明」という論文を書きました。理性は不完全だっちゅうことを数学的に証明してしまった。そういうこともあってですね、どんどん理性に対する疑問なり、この批判が投げ掛けられてきたんですよね。その結果として、今は理性の揺らぎということが、この言われておってですね、理性というものをそんなに信じて生きていったらいいのか。そんな信じて生きていってもいいのかというね、そういう反省が今、学問の分野においても出てきております。**

**だけど、なかなかその理性というものをどういうふうに取り扱い、理解したらよいのかという、そういう方法論がまだ確立されておりませんので、まだまだ多くの方々は、理性で考えて正しいと思うことをやったらいいんだというまだ理性に支配されたような考え方で仕事をし、また、生きておるのが現状であります。だけども、これからはわれわれが理性の時代から感性の時代へ、画一性の時代から個性の時代へと生き方を転換させていこうと思ったら、われわれは明確にこの理性の限界というものを知って、そして、理性を支配して、理性を使いこなして、そして、人間らしく生きていくという力をものにしなければならない。そのために理性というものをどういうふうに考える必要があるのかといったら、理性は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だ。そういうことを知りながらですね、われわれは理性を使いこなしていかなければなりません。**

**で、なぜ理性は不完全というふうに言う必要があるのか。だが、確かにこの理性そのものだけを考えれば完全に見えるんですけども人間はイコール理性ではない。人間は理性と感性と肉体という、３つの要素が有機的に絡み合って、人間という命をつくり、人間という世界をつくっておる。だから、理性だけでは、人間というものを本当に理解することはできない。理性だけでは、人間の問題を処理し尽くし得ない限界がある。処理し尽くし得ない限界がある。また、社会というものもですね、完全に合理的にできておったら、もう理性だけあったらもうなんでもできる、万能なんですけども、だから、社会というものも、合理的なものと合理的でないものが密接に絡み合って、社会の現実をつくっております。いろんな感情の絡み合いがあってですね、社会の問題が生じてきますので、理屈ではさばき切れないというところが、現実に社会にはあるわけですね。そういう意味で、この現実の社会の問題も、この理性だけでは対応し尽くし得ない限界があるというふうに、こう言わなければならないと。その意味で、理性能力は合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力だというように言うことができる。**

**で、もう１つ、理性が不完全ということの意味はですね、理性という能力は言葉を結び付けることによって出てくる能力なんだ。ということは、理性は言葉の限界を背負っておるんだ。言葉の限界とはなんなのか。言葉というのは、言葉によっては表現し尽くし得ないものがある。言葉の表現からこぼれ落ちてしまうものがある。それを実態というわけですけど、実態は言葉では救いきれないと。言葉の表現、言葉では表現し尽くし得ないものがある。理性は言葉と言葉とを結び付ける、概念と概念を結び付けて考えるのが理性ですので、その意味でですね、理性は言葉の限界を背負っておる。そういうところからもですね、この理性の不完全さというものが出てくるわけであります。ですから東洋ではですね、座禅、瞑想というようなことが行われて、理性ではつかみ得ない何かをつかもうとするような努力が昔から成されてきました。そういうときにいつもされることは、考えるなというんですね。考えておったら、理性の限界は突破できないと。言葉のない、言葉を超えた世界、理性を超えた世界。そこに悟りがあるんだというのがですね、座禅、瞑想が目指す悟りの境地であります。まあ、そういうことを考えても、理性能力には、はっきり限界があるということがですね、見えてくる。**

**特にこれからはアジアが燃える。西洋の時代から東洋の時代へと世界文明の中心が移行していくんだ。西洋人は理性と言葉に根拠を置いた、そういうこの文明をつくってきた。だけど、東洋人は、これから感性と言葉を超えた世界に原理を置いた、そういうこの文明をつくっていく段階に入ってくる。そういうことを考えてもですね、われわれは今、ようやく理性の限界というものを知るときがきた。そういうふうに、言わなければならないわけですね。だけども、理性能力というものをですね、単純に合理的にしか考えることができないというふうな、そういうマイナスの評価をするだけでは、理性のことを本当に知ったとは言えません。あらゆるものにはプラス面がある。マイナス面もあるけれども、プラス面もある。じゃあ、理性のプラス面はなんなのか。それは理性という能力は、本当のことも言えるけども、うそも言える。このうそを言うことができるというところに理性のプラス面があります。**

**で、本当のことを言うということは、事実に合ったことを言うことなんですね。理性においてはね。本当のことを言うということは、事実に合ったことを言うことなんだ。だけど、理性は本当のことも言えるけど、うそも言える。うそを言うっちゅうことはどういうことなのかといったら、事実ではないことを言うことなんだ。事実ではないことを言えるということは、いったいどういうことなのかといったら、理性は事実に支配されていない、事実に拘束されていない、事実に縛られてはいない、理性は事実ではない未来に対応できる。うそが言えるということは、この事実ではないことを言うことなんだから、そのことによって理性は未来に対応できる。まだ事実にはなっていない未来に対応できる。未来とはなんなのか。未来とは、希望であり、理想であり、夢であり、理念であり、目的である。まだ事実になっていない未来に対応できる。そこに理性のですね、特徴がある。その未来とはなんなのかといったら、理想であり、希望であり、夢である。じゃあ、理想や希望や夢とはなんなのか。それは、絶対こうだという世界じゃなくって、今よりもよりよい世界、それが希望の世界であり、理想の世界であり、夢の世界である。であるが故に、理性は今よりもよいことを考えることができる能力だというところに積極的な価値があるというふうにですね、言わなければならない。すなわち、理性というのは、合理的にしか考えることができない、有限で不完全な能力ではあるけれども、よりよいことを考えることができるところに理性の積極的な価値がある。そういう認識に基づいて、われわれは理性を使わなければならない。そういう認識をもって、われわれは理性を支配して、理性を使いこなさなければならない。そういうことになってくるわけですね。そこで、このどういうふうに理性を使うのかといったらですね、理性は絶対こうだと言うことはできないんですから、だから、自分がどんなに自分の考えを正しいと思ってもね、それは絶対、決して、絶対ではない、完全ではない。そのことをまずちゃんと知ることですよね。自分がどんなに正しいと思っても、それは完全ではない、絶対ではない。だから、それを人に押し付けたらいかんと。じゃあ、自分と違った考え方の人に出会ったらどうするか。自分と違った考え方の人に出会ったら、自分の考えは完全じゃないんだから、だから、自分と違う考え方の人から何かを学んで、そして、自分の考えをよりよい考えに成長させよう。それがよりよいことを考えることができる理性という能力を持っておる人間の生き方だということになってくるわけですね。自分の考えを絶対だと思って、自分の考えを相手に押し付ける。これは理性の間違った使い方です。自分と違った考えに出合ったら、相手から何かを学んで自分を成長させる。それがよりよいことを考えることができるという能力を持った理性の使い方なんだ。自分の考えが絶対ではない。だから、人になんか言う場合でも、こうしろと言ったら、それは命令であって支配だ。だから、どうしたらいいと思うと、考えさせるわけですね。自分が答えを持っておっても、それを押し付けない。僕はこういうふうにしたらいいと思うんだけど、君はどう思うと考えさせる。これが松下幸之助がですね、社員を成長させた方法論なんですよ。**

**で、松下幸之助は小学校しか出ていない。だから、人に教えることができるような学識や技術を持っていない。だから、自分で教えないでですね、常に社員に問うんですよ。なんか問題が起こったら、いつも社員にどうしたらええやろうな。どうしたらええと思うって聞くんですよね。で、社員がいろいろ言ってくれる。で、いろいろ議論させて、で、社員がひとりでに成長していく。そういうこの姿、そういう状況、そういう状態に誘導するんですね。で、自分が答えを持っておっても、命令はしないんですね。俺はこう思うんやけど、どんなもんやろうって、また社員に相談するわけですよ。社員がまたなんか言ってくれる。そのことによって、社員の意見も成長していく。それが不完全なる理性というものをね、この自覚した人間対応の方法なんですね。幸いなことに、その松下幸之助さんは大学も大学院も出ていない。であるが故に、そういう理性の不完全さというものを身に染みてですね、自分が知ってて持ってるから、だから、そういう人間的な対応ができた。これが個性の時代を生きるですね、理性の使い方であります。自分がどんなに正しいと思っても、それは不完全だ。だから、違った考えに出合ったならばですね、必ず自分は不完全なんだから、相手から何かを学んで、そして、この自分の考え方をより高度にし、より厳密にし、また、よりよい考え方に自分の考え方を成長させる努力をして、そして、必ず君からこれを学んだ。だから、僕はこんなに成長できた。ありがとうと言って相手に感謝をする、そういうふうな気持ちを持つことが謙虚な理性ということであります。**

**理性の時代というのは、自分が正しいと思うことをどこまでも主張せないかんと。負けたらいかんちゅって、こう教育されてましたからね。どうしても傲慢になってですね、その自分の考えで相手を説得してしまうという、そういうふうな形になり易かったんですよね。だけど、もはや理性の時代ではない。これからは感性の時代である、心の時代である。だから、これからはですね、どんなに正しいことでも、それを相手に押し付けるということをしたらですね、これは人を殺すことになってしまう。相手の個性を奪うことになってしまう。その意味では、自分が正しいことをしようとする場合に、どういうこの節度というものを意識しなければならないか。それは、いかなる正義、いかなる正しさといえども、人の心を傷つけたり、また、人間関係の中に対立を呼び起こすような仕方でその正しさが主張されるならば、その正しさは悪だ。その正しいことをしておる人間は悪人だというですね、そういう自覚を持たなければならない。いかなる正義といえども、人間関係を破壊する仕方でその正義が主張されるならば、その正義は悪だ。すなわち人間は正義の犠牲になってはならない。正義故に殺し合ってはならない。正しさ故に殺し合ってはならない。**

**理性は人間が支配しなければならない能力だ。理性は人間のためにあるのである。人間が理性のためにあるんじゃない。人間は真理のためにあるんじゃない。人間は正義のためにあるんじゃない。すべて正義も真理も理性も、人間のためにあるんだ。だから、われわれは人間を大事にしなければならない。その意味で、いかなる正義といえども、人間関係を破壊するような仕方、人間関係を壊すような仕方でその正義が主張されるならば、その正義は人間においては悪となってしまう。これがですね、これからの感性の時代の価値観であります。今は正義のためだったら人を殺してもいい。正せるためだったら、この人を殺すこともやむを得ない。それが今の理性に支配された人間の姿です。だから、宗教で戦争ができる。だから、思想が違えば殺し合えるんだ。それが正当化されるんだ。つい最近まで人類はそうやってきたんだ。イデオロギーによる戦争。共産主義と資本主義が戦う。自由主義と社会主義が戦う。それが悪ではなかったんだ。それが理性の時代のですね、人間が理性の奴隷となっておった時代のですね、姿である。**

**だけど、いまやその間違いに人類は気が付いてですね、理性故に殺し合ってはならない。どうしたらこの人間のための経済はつくれるのか。これまでは、経済のための犠牲に人間がなっておった。だけど、経済は人間のためにあるんだ。不況になるために経営者が自殺をし、金で苦しみ、不況になる度に社員が職をなくしてですね、路頭に迷う。これがいったい、なんで人間のための経済なのか。そういう反省が今、あるわけですね。完全に今、人類は経済の奴隷になって、経済の犠牲になってる。だけど、経済は人間のためにあるんだ。人間のための経済とはなんなのか。それがこれからの経済社会の目標であります。同様に宗教も人間のためにあるんだ。宗教のために殺し合ってどうするんだと。宗教は人間が幸せになるために宗教をつくったのに、宗教のために人間は不幸になり、殺し合ってどうするんだ。理性はなんで理性という能力を命がつくることになったのか。それはより素晴らしい生き方をするためだ。素晴らしい生き方をするために命は理性をつくったのに、その理性によって殺し合ってどうするんだ。そういうこの共通する課題がですね、今、人類にあるわけであります。**

**であるが故に、われわれは人間のための経済、人間のための宗教、人間のための理性のあり方というものを考えていかなければならない。そういう流れの中にあるわけですね。理性故に殺し合ってはならない。正しさ故に殺し合ってはならない。正しければ人を殺してもいい、もうそういう時代は終わったんだっちゅうことですね。そういうことを考えるならばですね、この人間は理性的に考えて正しいことをしようと思ってはならない。人間は人間的に考えて正しいことをしなければならない。理性的に考えて正しいことをするということは、真理は一つ、矛盾を排除するという、まあ、そういう理性のこの原則に従って人間が生きるということであって、それをやっておったんでは、理性的に考えて正しいことをすれば、必ず人類は殺し合う。違いが許せなくなる。人間的に考えて正しいことをするとはどういうことなのか。人間的に考えて正しいことをするとは、考え方が違う人とどうしたら一緒に仲よくなっていくことができるだろうか。それを考えるために理性を使う。これが人間が理性を支配して、そして、人間的な理性として理性を使いこなすという方法であります。理性的に考えれば殺し合う。人間的に考えれば、考え方の違う人とどうしたら仲よくやっていくことができるだろうか。それを考えるために理性を使って、こうしてみたらどうだろう、ああしてみたらどうだろうと考えていく。これが愛だ。これが人間が理性を支配して、人間的に生きるという方法である。**

**宗教の違う人とどうしたら一緒に仲よくやっていくことができるんだろう。それを理性で考えることが人間的理性である。それが人間的に生きるという方法である。性格の違う人とどうしたら一緒に仲よくやっていくことができるんだろう。価値観が違う人とどうしたら一緒に仲よく仕事ができるんだろう。それを考えていくことによって、今よりもより高度な、もっと質の高い仕事の仕方というものが出てくるわけですね。今は同じ考え方の人間と仕事をしていくというですね、同じ価値観の人間と仕事をしていくという、画一的なですね、この水準を合わせた仕事の仕方をします。そこにはこの仕事の仕方における積極的な成長の姿というのはありません。価値観が違う人と共に成長し、共に仕事をしていくという力をつくっていく。これがこれからの人類のですね、この人間性の成長によって実現される職場のあり方です。だけど、まだそれは誰もできません。これからどうしたらいいのかを考えていく。そういうこの段階に入るわけです。いろんな価値観があってもいい。それは個性の時代ですからね。そのためには何が大事なのかといったら、愛するとは学ぶことだ。この愛の原理がそこで要求されてくる。相手から学んで、自分の価値観を成長させる。価値観が成長しなければ人間は成長してないんだ。価値観が固定されたならば、その人の成長は止まってしまう。自分の価値観を成長させていく。それが量から質へとあらゆるものを転換していって、人間の質を向上させていくというですね、そういうこの生き方の目標であります。**

**そのためには、相手から何かを学ぶことをしなければならない。だけども、個性の時代なんだから、どんだけ相手の価値観や相手の考え方が素晴らしくっても、その人の全部を学ぼうと思ったら、自分を捨てることになってしまう。自分の個性を捨てることになって、相手に画一化されてしまう。だから、決して相手の全部を学ぼうと思ってはならない。個性の時代における愛の学びは、ちょっと学ぶっちゅうことなの。ちょっとだけよ。ちょっと学んじゃったりなんかしてですね、相手がちょっと学んで、だから、自分に今、必要なものだけをちょっと学ぶ。絶対に相手のものを全部学ぼうと思ったらいかん。それは実際には無理なんだ。相手のことをどんだけ学んでもね、それは自分流の学び方であって、本当の相手のことをちゃんと、相手とまったく同じようにわかるというわけにはいかない。人間皆、個性があるからね、違う。だから、自分に必要なものだけをちょっと学んだらいいんだ。それが愛なんだ。自分に必要なものだけをちょっと相手から学んで、そして、どう言うかといったら、君と出会えて僕はこれを君から学びました。そして、自分の考えをこういうふうに成長させることができました。ありがたかった、うれしいって感謝するわけですね。それが個性の時代の付き合い方だ。**

**大事なことは、自分を変えてはならない。成長させることが大事なんだ。自分の考えがどんなに幼稚な考え方であっても、自分の考えを変えようと思ってはならない。変えようとすることは、人の考え方に画一化されてしまって、個性をなくすことだ。大事なことは自分を成長させることだ。成長させようと思ったら、学ばないかん。だけど、相手のことを全部学ぼうとしたら、相手に画一化されてしまって、自分がなくなってしまう。だから、今、自分に必要なものだけをちょっと学ぶ。あんまりたくさん学んでしまうとですね、消化不良に陥っちゃったりなんかして、食べ過ぎちゃったらね、消化不良に陥っちゃったりなんかしてね、病気になっちゃいますからね。消化不良になったらいかん。自分が消化できるものだけを食べたらいいので、ちょっと食べて、ちょっと学んでね、そして、自分のものにして、で、自分を成長させて、そして、君からこれを学んで、僕はこんなに成長できました。ありがとうって感謝する。お互いにそういうふうにしてですね、学び合いながら、このやっていく。そうすると、だんだん、だんだん、学び合うことによって、お互いに考え方なり、この価値観が成長していって、結果としてその価値観が、だんだん学び合うから、だんだんとこの近づいていってね、そして、このお互いに相手のことをわかり合えることになってくる。だけど、お互いに個性がある。完全に一致はしてない。だから、どうするんだといったら、相手の長所で自分の短所を助けてもらって、相手の駄目なところは責めないで、自分の長所で助けてあげる。そういうふうにしてお互いに協力し合いながら仕事ができる。これが個性の時代のですね、スペシャリスト、ある領域のスペシャリストを組み合わせて、統合して、そして、仕事をしていくというシステムであります。これからは全社員がなんらかの意味でのスペシャリストにならなければならない。それが個性の時代の会社のあり方だ。わが社はいろんな分野のスペシャリストの有機的連関性によって組織が成り立っておる。これが、これからのですね、会社の姿の目標であります。スペシャリストがその個性ある力を統合させることによって、質の高い仕事をしていく。これが価値観の違う人間たちがですね、互いに長所と短所をうまく絡み合いながら仕事をしていくという、そういう職場のつくり方であります。学び合わなければね、お互いを知ることができませんから、協力もできません。同じ考え方の人間と仕事をしておったんじゃ、その仕事は成長しません。いろんな考え方の人間がこの関わることによってですね、より質の高い、より高度なですね、この内容を持った仕事ができるようになってくるわけであります。**

**その意味で、いろんな分野のスペシャリストがお互いに力を組み合わせながら、相手の短所は責めないで補ってあげる。自分の短所は相手から助けてもらって感謝をする。まあ、そういう構造でですね、この個性を持った能力を組み合わせていくというのがですね、これからのこの人間関係のあり方であります。そのためにも、俺の考えは絶対だと思ってはならない。みんな短所が半分ある。それは助けてもらわないかん。自分の考えを押し付けるんじゃなくって、相手からも学んで、また自分も相手に教えてあげて、それが個性の時代なんですね。個性の時代というのは、お互いに違うんだから、だから、学び合えるじゃないか。教え合えるじゃないか。助け合えるじゃないか。協力できる。それが個性の時代ですからね。それをどういうふうに実践として取り入れていくか。まあ、これがこの愛をどういうふうに現実の行動の中でですね、かたちにしていくかというやり方なんですね。そのためにわれわれは、自分の考えを相手に押し付けるという、この支配と命令と管理というね、この理性的な画一化を図るような、そういう意識から脱却していってですね、そして、この理性は不完全だという意識のもとでですね、お互いに助け合って生きるという、そういうふうな生き方を実践していかなければならない。これが愛の実践だと。愛することは学ぶことだ。相手から学ぼうとしないことは愛がないんだ。というふうなことを考えていく必要があります。**

**第３番目のこのよい人間関係をつくる愛の実力の成長のさせ方、第３番目は、人間に完全性を求めてはならないということですね。ついつい、やっぱり人間に完全性を求める、それがですね、相手のやる気をなくさせてしまったり、あるいは、この相手を責めることになってしまって、そして、相手に劣等感を与えてしまったり、あるいは、何かこうね、相手を完全性、相手に完全性を求めてしまうと、どうしても人間は注意されないようにしようと思って、事なかれ主義に陥って、無理をしなくなってしまってですね、そして、自分で判断しない。言われた通りにやっとったらいいんだって、そういう感じになってきて、自分で判断して動こうとしないでですね、ついつい命令待ちになってしまって、そして、この事なかれ主義に陥ってしまうというような、そういう状況になりやすい。人間は失敗しながら成長するんだ。失敗しないと、実力ができないんですね。**

**松下幸之助さんもそういうことがちゃんとわかっておってですね、失敗したら、よかったなと言うんですよね。そうしたら、失敗するということがわかったから、１つ賢くなったやないかと。今度はどうしたらええと思うって、また相談するわけ。今度はどうしたらええと思う。じゃあ、今度はこうしてみたいと思うんです。やってみなはれっちゅってですね、で、やらせて、またほんで、失敗することがわかっておっても、やらせてみる、やってみなはれっちゅうて。で、やっぱり失敗したかっちゅってですね、またよかったな、なんていうようなことを言ってですね。じゃあ、今度はまたどうしたらええと思うって言って、一歩一歩、成長させるんですね。成功するまでやらせるんですよ。でも、失敗しながらですね、成功するまでやらせていって、成功したときにそれが実力になるわけですね。失敗の途中でやめてしまったら、これは劣等感になってですね、自信喪失になるんですけども、成功するまで失敗してもやめさせなくって、成功するまでやらせるので自信ができる。これが不完全なる人間における自信のつくり方なんですよ。**

**失敗しながら、成功するとどうなるかといったら、俺やったら、どういう状況でもなんとかできるな、なんとかなるなって、そういうふうな自信ができてくるんですね。だけど、いっぺんで成功するとね、今度はうまくいくかなって、不安になるんですよ。人間は不完全ですからね、いっぺんで成功してしまうと、それは一種、完全性っちゅうことになりますので、いっぺんで成功すると完全性になりますので、かえってそれが自分にとって不安の材料になってですね、今度はうまくいくんかなと思って不安になってくる。だけど、失敗して、失敗して、失敗して、失敗を積み重ねながら、だんだん成長していって、最後に成功するとね、俺やったらなんとかできるな。俺が出ていったらなんとかなるな。まあ、そういうこの自信が湧いてくるんですね。まあ、その意味でもですね、人間に完全性を求めるということは人間を殺すことだ。人間は絶対、完全ではない。不完全だ。不完全ということは、どんな人間でも短所がある。長所も半分ある。短所はなくならない。このなくならない短所を利用しながら、人を成長させていく。これが人間教育だと。だから、失敗させなければならない。失敗させながら成長させて、失敗させながら成功へと導いていく。失敗を恐れさせない。失敗も成長だ。失敗も勉強だ。**

**発明王のエジソンさんなんかはですね、この何百、何千という発明、発見に関わったわけなんですけども、なんでそういう発明、発見ということをですね、たくさんすることができたのか。それは、この失敗ということに対する理解の仕方が違うんですね。普通の人は、失敗して、失敗して、失敗すると、だんだん、だんだん、自信がなくなっていって、駄目になってしまう。絶望に陥るんですよ。だけど、エジソンさんは、失敗の連続は成功への確率を増やすんだと考えるんですね。失敗するっちゅうことは、一歩一歩、成功へと近づいてるんだということなんですよ。で、もうちょっとで成功かもしらん。もうちょっとで成功のときが来るんだということを信じてるんですよね。ずっと失敗していったら、必ずどっかで成功するときがやってくると。だけど、大事なことは、失敗をする度に、今度はどうしたらええかなと思って、創意工夫をしながら失敗の連続を積み重ねていくと、成功になるんですよね。失敗してもええんやっちゅうてですね、なんも努力せんと失敗ばかりしとったんじゃ、これは成長しません。だから、失敗する度に、今度はどうしようか、今度はどうしようかと思って努力をしてると、必ず失敗の連続は、最後には成功へとたどり着いてしまうというのがですね、このエジソンさんの信念だった。だから、失敗してもやめなかったんですよ。**

**成功するまでやめなかったから、大成功になったんだ。普通の人はなかなかそう思えなくってね、失敗がどんどん、どんどん、続いてると、もう駄目かなと思ってしまってですね、やめてしまうんですね。だから、駄目なんだ。もう駄目かなと思ってしまうから、駄目になるんだ。必ず成功できるんだ。失敗を積み重ねていったら、失敗を積み重ねていったら、必ず成功にたどり着くんだ。それがエジソンさんの信念なんですよ。だから、成功するまでやめないんですね。だから、成功しちゃった。それが人間的自信のつくり方なんですよ。大事なことは、失敗しながら、創意工夫の努力を怠らないことがですね、大事なことなんだ。だから、失敗してもそれを責めないで、励まさないといかん。失敗を常に成長へ結び付けていく。失敗を最終的には成功へと結び付けていく。そういうふうな意識でこの人間は生きなきゃならんし、また人間の指導というのはしなければならないということなんですね。人間に完全性を求めるということは、人間に神になれと言ってることだ。人間に完全性を求めるということは、人間を殺すことだ。**

**よくうそを言うという人もおるんですけど、うそを言うと、必ず理性的な人は、うそを言ったらいかんじゃないかとこう言うんですよね。それが理性的な対応なんだ。だけど、感性と心を持った対応っちゅうのは、いったいどういうことなのか。人間はうそを言いたくって言うんじゃない。うそなんか誰も言いたくはないんだ。だけど、うそを言わなきゃならないような状況に追い詰められて、苦し紛れに、心ならずもうそを言ってしまう。それが人間の本心なんだ。だけども、うそを言うていいわけじゃないんだ。やっぱり、うそは言うたらいかん。だけども、人間は不完全だ。絶対うそを言うたらいかんということは、人間に完全性を求めることになってしまう。ここが非常に難しい対応の工夫のいることなんですよね。うそは言うたらいかん。そやけど、人間は不完全だ。不完全ということは、人間は不完全だということは、不完全なんだから、うそを言うこともある、だますこともある、裏切ることもある、失敗することもある、罪を犯すこともあるんだ。それが不完全っちゅうことの意味である。この不完全ということをどういうふうに使って人を育てるかですね。うそを言うたときに、うそを言うたらいかんじゃないか。これは人間に完全性を求めてるんだ。そのときに、うそを言うということは、確かにうそを言うたらいかん。だけど、うそを言いたかなくっても、うそを言わざるを得ないような状況に追い詰められてしまって、うそを言ってしまうのも人間だ。この不完全な人間の心のあり方というものをどういうふうに理解してあげるかですね。**

**親が子どもを育てる場合でもね、子どもは時々、親にいろいろ言い逃れでうそを言うたりするんですけども、だけども、うそを言うたときに、子どもにうそを言っちゃいかんじゃないかと言ったら、子どもはどうなるかといったら、うそを言うたらいかんことぐらいわかっとるわと。なんで俺がうそを言わないかんような状況に追い詰められてる、このつらさがわかってくれへんの、お父さんと、こうなってくるわけですよね。そこで子どもはぐれるわけだ。全然、お父さんなんか、俺のことわかってへん。誰も俺のことなんかわかってくれてへん。で、家を飛び出したりなんかするわけですね。基本的にはですね、誰もうそを言いたくて言うんじゃない。そのことをまずはですね、ちゃんと知ってあげなければならない。そして、うそを言うということが、どんなにつらいことなのかということをまずわかってあげなければならない。**

**じゃあ、なんでうそを言うようなことになったのかを理解してあげるというですね、そのうそを言うたことを責めて、うそを言わない人間をつくるんじゃなくって、なぜうそを言わなければならなかったのか。その理由を聞いてあげるというですね、そういう愛をまず示さなければならない。だけども、うそを言っていいわけはないんだ。だから、子どもの教育の場合でもね、子どもがうそを言うたときにですね、親なればどういう対応をするのかといったら、うそを言っちゃ駄目じゃないかというのは理性だと。愛があって、親なればどうするかといったら、うそを言った子どもを抱きしめて、うそを言わなきゃならんような状況に陥っておって、苦しんでおったのに、そのことに気が付いてあげられなくってごめんね、許してねと言って、子どもを抱きしめるんですね。そして、なぜ自分がその子どもが困っておったことに気が付いてあげられなかったんだろうという親の至らなさをですね、まず子どもに詫びる。そして、抱きしめて、ごめんね、許してねと言ってもらうと、子どもは、ああ、やっぱりお父さん、お母さんは、俺のつらさがわかってくれてたんやと。うれしい、ありがたいと思うんですね。それをやってから、その次に、だけど、うそを言っちゃ駄目なのよと言うと、子どもは無条件にうんと言ってうなずくんですよね。これが、この人間教育なんだ。うそを言った子どもを抱きしめて、ごめんね、許してね。これだけじゃ、甘やかしですからね。それは子どもを堕落させる愛だ。うそは言ったらいかん。そやけど、人間はうそを言わざるを得ない状況に追い詰められてしまって、苦し紛れに、心ならずもうそを言うということがある。そのことはわかってないといかん。だから、まずはそういうつらさをわかってあげてですね、今度からそういうつらいことがあった場合には、うそを言わんと、ちゃんと事情を話してくれたら、わかってあげるから、心配するな。大丈夫だよと、こう言ってですね、そして、うそを言わない、本当のことを言って生きていける、そういう状況をつくってあげるんですよね。簡単にうそを言ったときに、うそを言ったら駄目じゃないかと叱っとるだけでは、その人は直りません。うそを言わなくって済む状況をつくってあげないと駄目なんですよね。叱るんじゃなくって、うそを言わなければならない事情をまず聞いてあげる。そして、これからはうそを言わんでもいいよ。ちゃんと本当のことを言うてくれたら、それにちゃんと対応するから、大丈夫だから、心配せんと仕事をしてくれと。まあ、そういうふうな感じのですね、指導をしていく。それが、この愛の関わり方なんですね。うそを言うていいわけやない。そういうことも考えなければなりません。人間はどんな人でも短所があるんだからですね、その短所というものをどういうふうに生かしてね、利用して、そして、この人間らしく生きるかというところを考えないと、単純に長所はいいけど、短所はいかんという、そういうふうなこれまでのですね、対応をしておっては、これからの人を育てることはできません。**

**また、偏見というもの、これもなくならないんですよね、偏見。だけど、これまでは偏見もなくしましょうという、まあ、そういうこの生き方を、そういうやり方をやってきた。だけど、人間には肉体があるからね、どんな立派な人でもですね、どんな立派な人でも、自分の肉体のあるところからしかものは見えませんからね。また自分の肉体のあるところでしか判断できませんしね。また自分の肉体のあるところでしか感じられないし、考えられない。だから、どんな人でも必ず偏見を持ってるんですよね。だから、今、私が申し上げてることも偏見なんですよ、これは。感性というものを原理にしたら、こう考えられるということは、ほかのものを原理にしたら、そうは考えられんやろうということになってきますからね。哲学というのは、全部、偏見なんですよ。科学は事実を探究しますけど、哲学は解釈ですからね。どう解釈すれば、より素晴らしいかというのが哲学なんですから。だから、今の時代は、感性というものを原理にして、物事を解釈していかなければ、人類は成長できないという段階だからね。だから、この方法が一番ベストだということになるわけなんですけども、だけど、それにしても感性というものを原理にしたら、こう考えられるという偏見なんだ、これはね。**

**だけども、学問というのは偏見では成り立ちませんからね。だから、こう考えることが素晴らしいんだということをちゃんと根拠付けて、誰も絶対に反対できない、誰も絶対に異論を差し挟む余地がない。誰も絶対に認めざるを得ないという根拠を明確に示していくと、偏見でも学問になるわけですよ。なぜ今、それが必要なのかということをちゃんとわかれば、なるほどということになってきますので、みんなが認めてくれる。だけども、その考え方としては、それは偏見なんだ。どんな人でも、とにかくは今、自分の肉体のあるところでしか考えられない、判断できない。時代には時代の偏見がある。民族には民族の偏見がある。風土には風土の偏見があるんだ。人間はどんなに頑張っても、その偏見からは脱却できない。だから、偏見をなくそうとすることは無駄な努力だ。だから、大事なことは偏見をなくそうとするんじゃなくって、俺には偏見があるんだ。俺には偏見があるんだ。そのことをちゃんと知ったならばですね、われわれは自分には偏見があるんだから、だから、他人の言うことにも耳を傾けて、そして、違う考えに出合ったならば、自分の偏見のある考え方を、自分と違う考え方を参考にさせてもらいながらですね、その考え方のゆがみ方、あるいは修正しましょうという、謙虚な愛の心を持って相手に接することができる。だから、対立が生まれてこない。そして、相手から学んで成長できる。それは相手の考えを尊重することだ。それは愛だと。そういうことになってくるわけですね。**

**とにかく人間は不完全だ。完全じゃないということをどういうふうに生かして、生かし切って、仕事をし、生きていくかということをですね、もっともっとわれわれは真剣に考えないと、今よりも質の高い、今よりも高度な生き方や、この仕事の仕方というものをですね、つくっていくことはできません。これからは、量から質へとさらに転換していくんですから、質を向上させるためにはどういうふうなですね、考え方の成長を遂げなければならないのか。どういうふうな努力をしなきゃならんのか。それをこの追求していく必要があります。**

**次は、第４番目ですね。第４番目、よい人間関係をつくろうと思ったら、その次にしなければならない努力。これまでは、人間は勝つことに最高の喜びを見いだしてきた。競争して勝たんないかんという、そういう思いが非常に強かった。負けとったらいかん。負けとったら話にならん。そういうことでこれまでやってきたんですね。だけども、残念ながら、競争というこの意識がものすごく大きなストレスになってくる。受験競争を見るまでもなくですね、この競争という意識がいかに人間の心をむしばむか、いかに人間性を破壊するかを人類はいろんな面で知ってきた。だけども、残念ながら、競争という現象はですね、一生というか、絶対にこれはなくなることはない。同業者がたくさんあったならば、必ず競争という関係性そのものは出てきてしまう。だけども、この競争という意識を鼻先にぶら下げながら経営をすることは、もう醜い経営だと。経営にも品格がある。経営品質というのが問われる時代になってきてる。仕事をする場合でも、競争意識をむき出しにしてですね、仕事をしてるようでは、もう醜い。そういうこのことがですね、今は言われる時代であります。**

**じゃあ、いったいこの存在する競争という関係性そのものをどういうふうに扱っていったらよいのか。競争という関係性そのものは絶対なくならないんだ。で、これまでは、競争という関係性から出てくる、この意識をですね、ライバル会社をぶっ倒せとこう、外に向かって発散しておったんですね。だけど、そういうこのライバルをぶっ倒すという、そういう仕方で競争していく会社は、全部、業績は悪化してます。今、どういうふうなことが行われておるのかといったらですね、競争という関係性から必然的に出てくるエネルギーを外に向かって、ライバルを倒すことに持っていってしまうんじゃなくって、競争というエネルギーをですね、内面的に消化していって、自己変身、自己創造、自己変革の力に変えていく。競争というエネルギーを自分の能力を成長させることに、あるいは、競争というエネルギーを消費者の要望に的確に応える技術や商品をつくることに変えていく。あるいは、競争というエネルギーを、会社の質を成長させていくリストラクチャリングに使っていくと。いわゆる業態の転換、構造変革をしていくという、その力にですね、競争というエネルギーを変えていく。これが今のやり方なんですよね。**

**ライバルを倒すことによって、この自分が生き残ろうとすることは醜いやり方だ。そうじゃなくって、ライバルを倒すんじゃなくって、ライバルを放っておいて、自分自身の能力を高め、自分自身のお客さんに対する対応姿勢を成長させ、客の要望に的確に応えるという、そういうこの努力をしていき、また、会社の体質を変えて、業態の転換を図り、リストラクチャリングを徹底的に進めていき、その会社自身の内的な発展、成長を促していって、自己変身、自己創造、自己変革を遂げていく。これが、これからの競争という関係性に対する対応の方法だということに、今、なってるわけです。だけど、まだまだですね、現実的には、これからはどんどんとこの世界的に国際化されて、グローバル化していく。だから、堺屋太一さんと渡部昇一さんの共著でね、「競争の原理」という本が５年ほど前に出ましたけども、まだまだこれから競争意識を高めていかないとですね、日本は駄目になるぞという趣旨の本が出ております。**

**だけど、もはや競争という意識をですね、むき出しにする時代は終わったと。勝てば負けるものができてしまう。じゃあ、どういうこの意識を持って、これからの時代は生きていったらよいのか。勝てば負けるものをつくってしまう。だから、勝つことに最高の喜びを見いだすという、そういう価値観からですね、この新しい生き方は、力を合わせて共に成長していく。勝つことよりもっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することだと。そういうふうな意識で、どういうふうにこの仕事をやっていくかっちゅうことなんですね。力を合わせて共に成長していく。勝つことより、もっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することだ。勝ったら負けるものをつくってしまう。力を合わせば、共に成長できる。この価値観で、どういうふうにこれから仕事をしていくか。そのために今、統合とか、パートナーシップとかって言われてる価値観がですね、あらゆる物事を動かしておるという時代になってきてるんですね。競争して勝つことは、もうすでに醜い人間性を意味しておるんだと。そうじゃなくって、力を合わせて共に成長するという道を求めていかなければならない。力を合わすことによって、共倒れになってしまうようじゃ、元も子もないから駄目なんですね。力を合わせば、共に成長できるという、この組み合わせをですね、模索していく。そこにこれからの、この競争とは違う生き方が生まれてくると。**

**で、基本的にこのよい人間関係をつくろうと思ったら、勝つことよりもっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することである。互いに違う個性を持っておる人間が、力を合わせて共に成長するという生き方をどういうふうにつくっていくか。ここにこれからのこの生き方の基本があるのであって、いつまでも相手に勝とうとするという、まあ、そういう意識を持っておったのでは、もうこれからの時代は嫌われて、かえって自分自身も生きにくくなって、そして、この醜い人間性と言われる。力を合わせて共に成長していく。そういうふうな意識で、いろんなことをしていかなければならない。実際問題、今はいろんな業界で統合という関わりが進んでおるわけなんですけども、だけども、同業者間の統合というのは、これは非常にマイナスの統合といってですね、少々のことがあってもつぶれないという、そういうふうなこの規模の拡大を目指していく。そして、その実際問題、同業者間が統合すると、競争という関係性がなくなってしまうもんですから、かえって緊張感が緩んでしまってですね、もう安心だということで、成長というか、危機感がなくなるんですね。**

**その意味で、これから志さなければならない企業経営上の大きな課題はですね、同業者間で統合を進めていくという、そういう力を合わせるというんじゃなくって、自分の今やっているこの仕事と全然違った、他業種の会社と、もし協力するならば、どんなことができるだろうかという、そういう統合、これを有機的統合っちゅうんですね。そういうこの、もし力を合わせたならばどんなことができるだろうか。違う能力を持ってる人と、もし能力を合わすならば、どんなことができるだろうか。そういう仕方でこの人間関係を考えていく。これが個性の時代を生きる愛の働きであり、また新しい会社経営の方法です。他業種と組んだならば、どんなことができるだろうか。これがこの業態の転換を新しい時代の要請に応じてですね、機敏に考えていく方法論でもある。他業種と組むということによって、個性あるこの統合関係が生まれてくるんです。そのことによって、他の会社はまねができない。そういうこの経営の手法が生まれてくる。統合経営とか、有機経営というんですけども、そういうことも考えていかなければならない。**

**で、自分とは違う能力を持った者と自分がもし協力するならば、どんなことができるだろうか。これはもう個性の時代を生きていく、非常に大事なこの考え方なんですね。勝つことよりもっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することだ。考え方が違う人とどういうふうにしてですね、力を合わせて共に成長することができるだろうか。相手に勝つことじゃない。共に力を合わせる方法を考えていく。これが統合能力を磨く、パートナーシップの精神を磨く。そういう方法になるわけですね。これは会社内部でもですね、いろんな性格の人がいる。いろんな考え方の人がいる。いろんな能力を持ってる人がいる。自分とその人が、もし協力するならばどんなことができるだろうか。その可能性にこの自分の成長を掛けていく。そういう生き方ができたならば、どんなにすごい、どんなに素晴らしい組織が、また会社ができるだろうか。そういうこともですね、考えてみなければなりません。とにかく個性の時代というものが、これから確実にどんどん、どんどん、進んでいくんですからね。お互いに個性を認め合いましょうということが、もうこれから主流になっていって、そして、それをしないとやっていけない状況になるんですから、そのことに対応する力をつくっていかなければならない。勝つことよりもっと素晴らしいことは、力を合わせて共に成長することなんだ。そういうですね、意識を人間関係において、われわれは持つ必要があります。**

**で、最後の５番目です。最後の５番目のよい人間関係をつくる方法というのは、ユーモアのセンスですね、ユーモアのセンス。ユーモアというのは、これは人間関係の潤滑油というふうにいわれてるものであって、ユーモアというのは、これは人間しか持っていない文化。笑いの哲学というのは、昔、アンリ・ベルクソンの哲学で、笑いの哲学というのがあったんですけど、この笑うというのは人間だけなんですね。最近は、このチンパンジーだって、ウマだって笑ってるんじゃないかっちゅうような方がいらっしゃったりなんかするんですけど、あれは笑ってんじゃない。ウマやチンパンジーが笑ってるように見えるのは、あれは気持ちがいいから、歯をむき出してるだけなんだ。歯をむき出してると、なんか笑ってるように見えちゃったりなんかするのでね、チンパンジーは笑ってるんじゃないかっちゅうようなことをおっしゃるんですけど、笑うというのは、本当に笑うというのは、意味と価値を感じる心がないと笑えないんですよ。で、意味と価値を感じる感性を持ってるのは人間だけなんですね。だから、笑いの文化というのは人間しかないんだ。サルがお互いに冗談を言い合いながら、笑わし合っとったなんていうような、そんな話は聞いたことがないですからね。だけど、人間はお互いにサラリーマン同士がですね、お互いに冗談を言い合いながら、笑わし合いながら、お互いにその人間関係をね、よくしていくという努力をしてるというのは人間だけができる能力なんですね。**

**ユーモアというのは、人間関係の潤滑油というふうに呼ばれる。で、ユーモアとはなんなのかっちゅったらですね、ユーモアの反対はブラックユーモアですから、ブラックユーモアというのは、これは人間に恐怖と不安を与える。だから、このユーモアというのはその反対ですから、ユーモアというのは、人間の心を希望とか、明るさとか、癒やしとかですね、そういうこのプラスの方向性に人間の心を導いていくというのが、ユーモアのセンスというものなんですね。私が時々、申し上げるのは、なんちゅうか、本中華、冷やし中華とかですね、なんとかセントバーナードとかですね、ユーモアっちゅうよりは駄じゃれでですね、いわゆるおやじギャグと言われるような、そういう部類の単に笑いを取るだけのこのしょうもないもんなんですけども、笑いを取るということは、一応皆さん方にあんまり退屈させたらいかんと思ったりなんかして、その配慮しながら考えて言ってることなんで、それも愛の精神には変わりはないんですけど、あまりにもちょっとレベルが低く過ぎるようなものなんで。**

**本当のユーモアというのはですね、ユーモアという言葉自体が、ヒューマンという言葉と親戚筋にあたる言葉なんですね。ヒューマン、ユーモア、ヒューマンって、ちょっと似てますよね。だから、ユーモアがあるということは、ヒューマニティー、人間性があるという意味合いも持ってくるわけなんですよね。とにかく笑うということは、人間しかできないですね、独特のこの表情、心なんだと。で、そういうことでですね、このユーモアというのは、人間の心を理屈抜きに結び付けるというふうなことがある。またそのユーモアが最もこの高度になった場合に感動が生じてくるっちゅうのは、そういうこともありますので、というのは、よく西洋映画なんかを見るとですね、ものすごく追い詰められたような状況で、みんなの心を解きほぐそうと思って、ある人がこう、ものすごくかっこいいユーモアを言うことがあるんですよね。よくこんな追い詰められた状況で、こんなかっこいいことを言ってられるなと。あれは映画の中だから言えるようなもんなんですけども、とにかくそういう人を感動させることができるようなユーモアをね、ぽんとこう言う。まあ、それは、非常に欧米的なユーモアのセンスなんですけども、ああいうのも、やっぱりですね、われわれは磨いていったならばね、それを獲得していったならば、非常に素晴らしい生き方ができるんじゃないかなと思うんですね。とにかくそういうこの人の心を和ませたりですね、人の心の緊張を解いたりするような愛をもって出てくる言動がユーモアと言われるわけですね。**

**私が一番、記憶に残っているのは、今のアメリカのブッシュ大統領のお父さんのブッシュ大統領がですね、日本に来られたときがあって、ちょうどその頃は、宮澤喜一さんが日本の総理大臣だったんですね。そのときに宮中晩餐会が行われて、宮中晩餐会の中で、そのブッシュ大統領が疲労のために気を失われて、倒れられたことがあったんですよ。その宮中晩餐会というのは、そういうこの国家元首がいるようなところで、一国の大統領が気を失うっちゅうことは、一種、国の恥だというようなところもあって、みんな唖然として、非常にざわざわっとして、不安になったような、そういう状況があったんですが、そのときに、ブッシュ大統領の奥さまがぱっと立たれてですね、どういうふうにおっしゃったかといったら、「まあ、ジョンたら、本当に目立ちたがり屋なんだから」とおっしゃったんですね。ジョンというのは、これはあだ名でそういうふうに家庭では呼んでるらしいんですけども、「まあ、ジョンたら、本当に目立ちたがり屋なんだから」。自分に注目をされたいと思って、あんなことをやっちゃったのよというね、そういうこの冗談っちゅうか、ユーモアでみんなを救われた。そういうふうに奥さまがおっしゃられたので、なんとなく笑いが漏れてですね、その大統領の失態も、ああ、そういうふうな感じにも解釈できないことはないなっちゅうようなこともあったりなんかして、そういうことで、なんとなくその状況が暗くならないでですね、明るい方向にみんながなっていったということがあって、さすがにやっぱり、一国の大統領の奥さんという、ファーストレディーっちゅうのは、やっぱり違った力を持ってるなと。大統領を救うだけじゃなくって、その状況にいたみんなの心を明るい方向に持っていくユーモアのセンスがある。すごいことやなと思ったんですね。**

**そういうこのなんかみんなが困った状況になるときに、ふっと漏らす一言がですね、みんなを明るい、希望ある方向性へと持っていって、その失態を救ってあげるようなね、まあ、そういうふうな愛の精神が、まあ、ユーモアというふうに言うことができる、象徴的なものです。まあ、とにかくそういうこのユーモアの精神というものも、もっともっと、われわれ、磨いていったならば、非常に素晴らしい人間関係をつくっていくことに役立てることができると思います。日本人でもいろいろね、落語や漫才やという笑いの文化がありますので、とにかく笑うということは、理屈を超えた人間の心の結び付きをつくっていくという働きをしますので、大いにそういうこの笑わせるというふうなこともですね、含めて、ユーモアの精神というものを磨いていったならば、あんまり堅苦しいことばっかり言うとるんやなくって、このユーモアの精神というのを磨いていったならば、もっともっと素晴らしい愛ある人間関係をつくっていく力を持つことができるんじゃないかと思います。とにかく一応、今日は、よい人間関係をつくるために、どういう努力をしたらよいのかっちゅうことをお話させてもらいました。どうもありがとうございました。**